

②2014年度 基調編

1	2014年度	公益社団法人日本青年会議所	会頭所信及び基本資料	39
2	2014年度	公益社団法人日本青年会議所	近畿地区協議会 会長所信及び基本方針	57
3	2014年度	公益社団法人日本青年会議所	近畿地区 京都ブロック協議会 会長所信及び基本方針	59
4	2014年度	公益社団法人乙訓青年会議所	理事長所信及びスローガン・テーマ	61
5	2014年度	公益社団法人乙訓青年会議所	基本計画、委員会・会議体活動計画	66
6	2014年度	公益社団法人乙訓青年会議所	第2次収支予算書	71
7	2014年度	公益社団法人乙訓青年会議所	会議構成員	73
8	2014年度	公益社団法人乙訓青年会議所	組織図	74
9	2014年度	公益社団法人乙訓青年会議所	委員長方針	76
10	2014年度	公益社団法人乙訓青年会議所	委員会配属	84
11	2014年度	公益社団法人乙訓青年会議所	出向者一覧	85
12	2014年度	公益社団法人乙訓青年会議所	年間公式スケジュール	86

「厭離穢土 欣求浄土」

混沌とした現代社会を真に明るい豊かな社会へと導くのは私たち青年の責務である。私たちは今、この国の悠久の歴史の中で光り輝く未来を信じて、学び、そして行動する責任世代であることを自覚しなければならない。青年たちよ、須らく奮起せよ。そして、取り戻すのだ、日本の矜持を。

はじめに

1560年、今川義元が桶狭間の戦いで織田信長に討たれた時、今川軍の尖兵の隊長であった徳川家康は、命からがら故郷（岡崎市）の大樹寺に逃げこんだ。家康は己のふがいなさを悔やむと共に、総崩れとなった今川勢の前途を悲観し、もはや自分の命はこれまでだと考え、大樹寺にある先祖の墓前で自害しようとする。その時、時の住職、登誉上人に諭された言葉が「厭離穢土 欣求浄土」である。「お前は若い時から戦場に向かっているけれど、その心はただ敵を倒すだけにあるのか。功をたて、城を落とし、国を奪って、それでお前は何がしたい。乱世においては、武士が私利私欲のために戦っているのだから国土が穢れている。正しい目的をもって住みよい浄土にするのがお前の役割だ。」と説かれ、「志が小さい、もっと大きな志をもて。」と強く諭された。自身の為すべき役割に気づいた19歳の家康は、その後、この8文字を旗印に平和な国土の建設に邁進し、265年に及ぶ天下泰平の世を築き上げた。

人は、人生において幾度も挫折するものである。しかしながら、目指すべき夢が明確ならば、必ず乗り越えることができる。そして、幾度も困難を乗り越えた強靱な精神と情熱をもった人は、自信と誇りに満ちた活力ある人生を手にすることができ、周囲を希望の光で照らし出すことができる存在となる。家康は、様々な挫折を乗り越え苦しみを糧とし、夢や目標に向かって突き進んだことで、念願の天下泰平の世を築き上げることができたのだ。

「人生において最も大切なのは経験である。」

これまでの青年会議所の活動、運動を通し、どんな困難が立ちはだかろうとも不可能を可能にしてきた場面を何度も体感してきた私自身だから、そう断言できる。志を高くもち行動した者だけが得られる、かけがえのない経験がある。だからこそ行動するのだ。特に青年期における経験は、その先の人生を大きく変えてくれる。また、人

生において「成功」は約束されていないが「成長」だけは約束されている。それだけに時代の変革者たらんとする私たちJAYCEEには、失敗を恐れない積極果敢なチャレンジ精神と行動力が、今求められている。それにより、人間的魅力をもった強いリーダーシップを得ることができるのだ。そして、世の中の営みはすべて「人」によって成り立っている。この不透明感が漂う現代社会にあっても行動的で意気あふれる人財が育ち、活力に満ちあふれた地域をつくり上げていくことが、必ずや「たくましい国」日本を創造していくのだ。だから、私たちJAYCEEから光り輝く未来に向けて奮起するのだ。

この国を牽引する責任と使命

JAYCEEの多くは、中小零細企業で経営に関わるメンバーである。私の出身地は地方都市であり、決して大きくはない経済圏において生業を立てている。私は、自分の会社においてはプレーヤーであり、そしてマネージャーでもある。その両方の役割を担いながら社業を営んでいるのである。2008年のリーマンショック以降、多くの中小零細企業が倒産した。会社が倒産して行き場を失うのは、経営者や経営幹部などのマネージャーたち、そして、従業員つまりプレーヤーたちも同じだ。だから彼らは自社の経営状態に関心をもち、社業の発展を心から願っている。そして、会社の繁栄の中に自らの幸せがあることを知っているのだ。

私たちと国や地域の関係も同じである。国や地域と私たちの生活は直結している。万が一、国が凋落すれば危険にさらされるのは私たち国民である。また、地域が衰退すれば、次世代の子どもたちに故郷をつなぐことができないかもしれない。国や地域をより良くしようと牽引するのは、決して政治に携わる人たちだけではない。だから、これからも私は心眼と矜持をもって国や地域に常に関わっていきたい。そして、それは決して難しいことではなく言い換えれば、人々が属する家族や会社といった身近な社会と接点をもち、大切に想うことから始まっているのである。家族を守り、友を助け、地域を愛し、国を想う。この国の一員である私が能動的に変わることから、水面を走る波紋のように社会が変わっていくのだ。だから先ず、私自身が責任と使命を感じ私の大切な人たちにとってかけがえのない存在になろう。そこにいなくてはならない存在になろう。そんな私の小さな変化から世界を変えられると信じている。そして、世界、国、地域、家族などに属している者として、自分の立ち位置を確認し何をすべきかを青年会議所で学び、そして行動しよう。誰よりも明るい未来を望み、日本を牽引するのは責任世代である私たち青年でなければならないのである。

「たくましい国」日本のかたち

今、どれだけの日本人が一国民であることに誇りを抱き、目の前にいる家族が住み暮らす地域、この日本の未来に希望をもっているのだろうか。日本というこの国を大切に感じ、その拠りどころとなる豊かな文化や先達が築き上げてこられた価値観、歩んでこられた誇れる歴史があるにもかかわらず、私自身にもこの国の未来に対する言い知れぬ不安が脳裏をよぎる。戦後の日本は国家として迷走し、本来あるべき日本とはあまりにもかけ離れた姿を形成してきたのではないだろうか。そして、その原因は、戦後のGHQ(連合国軍総司令部)の統治政策に見ることができる。GHQの占領政策の目的は日本国家の解体であり、日本を日本たらしめてきた、あらゆる価値観が否定され、日本人から矜持を奪う結果につながった。こうした状況の中で作られたのが現行の日本国憲法である。憲法の出自については、私たちも近現代史の検証や憲法問題の取り組みで明らかにしてきたが、押しつけられた憲法と批判するだけでは意味が無い。これまで国家とは統治(権力)機構としての側面だけにとらわれがちであるが、歴史、伝統、文化を共有する歴史的な共同体と捉えるべきではないだろうか。

幕府使節随行員として清国へ渡った幕末の藩士たちは、欧米列強に国益を搾取され、国土を蹂躪されている清国を目の当たりにし愕然とした。そして、内乱が治まり、政情が一時的に保たれていることだけで安堵する清国の人たちを見て強い危機感をもったという。その危機感とは、直接国益が損なわれることに対してのものではなく、自分たちの力で自分たちの国を護ろうという意識がなくなってしまうことに対してのものであった。

国家を歴史的な共同体と見れば、今を生きる私たちの世代だけでなく、この国を創り今日の礎を築いてこられた先達の世代、そして、これから生まれてくるすべての日本人によって構成されているのが日本国家である。この過去から現在、そして未来へのつながりを強く意識し、私たちは先達の声に耳を傾け、未来への可能性を切り拓いていかなければならない。それが過去と未来のつながりに立つ私たちの責任なのだ。憲法は国のかたちの根幹であり、これまでの歴史、伝統、文化、そして受け継がれてきた精神性に立脚したものでなければならない。これまでの護憲、改憲といった二項対立の議論から脱却し、今こそ、私たちは未来に希望を託すことのできる国家像を、憲法論議を通じて描いてみたい。そして、青年らしく変えるべきは変え、守るべき理念は守ることを正々堂々と主張すると共に、全国各地で更なる憲法論議が深まる運動を展開したい。そして、わが国の憲法が国民の手により築かれることを信じている。

洋国家・日本の姿

自分たちの住む日本が四方を海に囲まれ、海から多くの恩恵を受けている海洋国で

あることを、私たちは認識しなければならない。日本は国土面積こそ38万平方キロメートルと小さいものの、日本の領土・領 とEEZ(排他的経済水域)を合わせた面積は447万平方キロメートルにも達し、世界第6位の広さを誇る。この数字をみれば、わが国が海洋大国であることが理解できる。そして、近年の調査では、南海トラフ、北海道周辺海域に、6兆立方メートルのメタンハイドレートが存在すると言われており、エネルギーの大半を海外からの輸入に頼っているわが国にとって、潜在的な可能性が期待される場所である。しかし、東シナ海では日中間のEEZが重なっており、日中中間線の4キロほど西側に位置する白樺ガス田の開発に、急速な経済成長によりエネルギー問題を抱えた中国が着手している。日本政府は鉱床が日中中間線を越えていると抗議するものの、開発は今なお続いており、絶対的にわが国の国益は損なわれているのである。1968年、国連アジア極東経済委員会(ECAFE)が東シナ海の海底調査を実施した結果、尖閣諸島近海に埋蔵量豊富な油田がある可能性が高いことを発表した。その数年後に台湾、中国が突如として尖閣諸島の領有権を主張し始めたのだ。東シナ海ガス田開発問題もこうした歴史的な文脈にあることを、しっかりと理解しなければならない。歴史的にみても尖閣諸島は、わが国固有の領土であることに疑う余地はないが、果たしてどれだけの国民がこのことに意識をもっているだろうか。領土・領海問題は、わが国の主権に関わる問題であり、私たちの無関心が国益を損ねていることを自覚しなければならない。私たち日本人は、北方領土、竹島を含め、この国の領土・領海を正しく理解し、そこにある大切な天然資源を未来に向けて守りゆく意識を高める運動に取り組んでいきたい。

国家を構成する主権者としての義務

2013年7月21日に実施された参議院議員選挙では、憲法改正、原子力政策、経済政策などが主要な争点とされ、結果は、政権与党(自民党・公明党)側の圧勝により衆参の「ねじれ」が解消されることとなった。この選挙では公職選挙法改正により選挙運動におけるインターネットの活用が解禁され、若年層の政治参画に対する一定のプラス効果は認められたものの、投票率自体は52.61%と振るわず、ネット解禁が投票率向上に必ずしも高い有効性をもつとは評価しがたい結果となった。世界に目を転ずれば、21世紀になってもなお、民主化を求め、自国の進むべき方向性を決める「一票」を獲得するために、様々な国の民主化運動に絡む流血の惨事が起きている。こうした国々の人々の多大な努力と犠牲を横目に、わが国の「民主主義」を巡る情勢をみると、いささか恥ずかしい気持ちに苛まれる面があるのも事実であろう。誠に幸いなことに、私たち日本人は生まれながらにして「主権者」であり基本的人権

も保障されているのは誇らしいことだが、果たしてどれだけの人々が国益やこの国の未来を真剣に考え、各政党が掲げる政策や候補者の人物を吟味して投票しているだろうか。また、選ばれる政党や候補者側はどうだろうか。経済面では世界的に認められた地位を築いてきた日本であるが、政治面では、選挙における一票の格差が立法府の怠慢により未だに放置され、「地盤・看板・鞆」即ち、血統や知名度、資金を重視するいわゆる「三バン選挙」が未だに残り、選挙運動においては政策ではなく候補者名だけを街宣カーが連呼し、選良たちの集う国会や議会では野次の応酬が散見され、余り自慢できない現実が横たわっている。私たちはこうした現状を今一度しっかりと踏まえて、公正中立、不偏不党の公益社団法人として、日本の民主主義をさらに高度なものとするために、継続的に行動しなければならないと考える。有権者が選挙において果たすべき役割を自覚すると共に、政策本位による政治選択を行える環境の拡充に取り組み、国民の誰もが、地域を想い、国を想い、未来を描きながら政治参画できる社会にしていきたい。

具体的にはまず、従来から政策本位による政治選択を実現するために取り組んできた公開討論会をさらに進化させたいと考える。これまで、先達の10年以上に及ぶ運動展開によって、「青年会議所による公開討論会」は全国的に定着しつつあり、討論内容も年々進化し、手法においても候補者相剋のクロストークにより深味のある議論が実現している例もある。本年は大規模国政選挙が予定されていないこともあり、身近な地方自治レベルにおいて、こうしたクロストーク型を原則としつつ、規模、内容のさらなる充実と、事前周知の徹底を図るなどして「実際に討論会に足を運ぶ有権者数」を劇的に増加させ、「地域住民が自らの共同体のあり方を真剣に考える」取り組みを図っていきたい。

また、PDCAサイクルにおいてチェック機能にあたるマニフェスト検証は、当選した政治家とその政策を評価するものとして、なかなか浸透していないのが現状であると考え。しかし、政策の実現は、政治を行う者だけの責任ではなく、有権者にも責任があり、政策について深く学ぶことで、有権者としての民度とリテラシーを向上させる機会として定着させるべきである。私たち有権者が選択した政策の進捗状況を確認し、次回の政治選択に対しての判断基準にするためにも、マニフェスト検証に取り組んでいかなければならない。

そして、2011年に運用を開始した「e-みらせん」は、若年層の政治参画を向上させること、候補者の考えをより多くの国民に周知すること、そして有権者の声を政治へ届けることなどを目的としている。少しずつ定着しつつあり、先の選挙でも多くの有権者、候補者が活用したと感じているが、まだまだ十分に機能していると言えないことも事実だ。有権者がいつでも、何処でも候補者の政策を確認でき、政治家

の人柄や政策をデータベースとして蓄積できる「e-みらせん」を、今後も国民に必要とされ、実用性あるものに進化させ、政策本位による政治選択を実現させたい。

真の経済復興

2012年12月26日に発足した第二次安倍内閣において安倍首相は、(1)大胆な金融政策、(2)機動的な財政政策、(3)民間投資を喚起する成長戦略、の「三本の矢」からなる「アベノミクス」を提示した。安倍内閣は最優先政策を経済再生と位置づけ、デフレ脱却に向け、金融・財政政策については既に「矢」が放たれ、アメリカのオバマ大統領をはじめ各国の政府関係者、有識者からも支持され内外の注目を集めたが、肝腎な成長戦略については未だ有効な具体策が提示、実行されておらず先行きには不透明感が漂う。この間、GDPの2倍超という世界最悪水準の公的債務を有するわが国は、国際社会からは、消費税率引き上げや社会保障見直しによる現実的な財政健全化が求められているのが実情である。そもそもわが国のような自由主義経済体制の下では、経済成長はひとえに民間セクターの努力により実現するものなので、まずは民間セクターに位置する私たち青年経済人が努力しなければ何も始まらない。

また、わが国は少子化に伴う生産年齢人口の減少傾向が続いており、こうした状況下で経済成長を実現するには、生産性の飛躍的な向上が必須となっている。一人ひとりが、この生産性向上の面からどのような経済再生への貢献ができるのかを真剣に考えることが、オール日本で経済復興に向け力強く前進させる上でのカギになる。このような状況の中で、私たち青年経済人は、日本経済および地域経済を支える中小零細企業としてどのように行動すべきなのだろうか。

今こそ、青年会議所の活動、運動を通じてマクロ、ミクロ両面における経済情勢に対する見識を高めると共に、TPP交渉の本格化や新興諸国の動向などのグローバルな環境変化を踏まえつつ、これをグローバル市場における1プレーヤーとしての戦略的かつ具体的な行動に繋げることにより、わが国の経済成長の担い手となるべく努力していこうではないか。私たちが青年経済人として、持続可能な経済活動を通じ、商品・サービス提供による社会貢献を行うことはもとより、雇用創出、納税、地球環境への貢献といった社会的責任をしっかりと果たし続けることが明るい豊かな社会を実現する上で何よりも重要であるという「当たり前だが難しいこと」を今一度、問題意識として共有しつつ、共に前に進めていきたい。

また、これから経済交流が進展するであろうロシア企業との関係構築の足がかりを日ロ友好の会と連携を図りながら進めていくと共に、現役JCメンバーであり、国会議員でもあるメンバーで構成されたJC議連とも連携し、オール日本で経済復興に向

け力強く前進させたい。グローバル化する時代の中で、日本が生き残り、存在感を示し、世界を牽引していく「たくましい国」日本を創造するためには、私たちが青年経済人としての責任を果たし、真の経済復興が必要不可欠なのだ。

この国を牽引するグローバルリーダーの育成

失われた20年と言われるように、かつて日本が誇った技術力や経済力は、台頭する新興国との国際競争の中で相対的に力が低下しているように感じる。また、政治、経済、社会のシステムも行き詰まりを見せている。しかしながら、それ以上に憂慮すべきは、日本を支えてきた大切な価値観や他を慮る心といった日本の伝統的な精神性に国民の大半が価値を見出せなくなっている状況である。私たちが未来を切り拓くために選択すべき道は、先達が大切にしてきた世界に誇るべき日本の伝統や文化に立脚したものでなければならない。今一度、社会を覆う閉塞感を打破するために、日本の矜持を取り戻すべく過去に学び、現状を取り巻く幾多の問題を解決するための知識を得て、行動すべきときである。そのために自国を誇れる歴史観と確かな国家観を兼ね備え、柔軟な発想力と行動力で国民を牽引し、未来を切り拓き、グローバル化する社会の中で活躍するリーダーをわが国の貴重な人財として全国各地に育てていきたい。東日本大震災が発災し、社会システムが大きく変わろうとしている今、新しい「震災後」時代の礎を築き、この国を牽引する力強いリーダーの誕生を切望している。

新しい「震災後」時代の礎を築く

東日 大震災が発災した2011年、全国から多くのJAYCEEが被災地支援に駆け付けた。私たちのこの迅速な行動には、各方面から多くの評価をいただいたが、同時にいくつかの反省点も残した。OBを含めると20万人をも超えるJAYCEEのネットワークを有しながらも、必ずしも有機的に機能しなかった。青年会議所という組織の中で有事に対処する体制が確立されていれば、今以上にJAYCEEのネットワークを活かした支援活動ができたと感じている。

震災から3年が経つ。何らかのかたちで被災地支援に駆け付けてきたJAYCEEには、卒業された方ももちろんいるが、今もなお各地会員会議所の中心で活動をしているメンバーも少なくないはずだ。人々と関わって得られる「ありがとう」という感謝のコミュニケーションによって、人も救われ、また自分も、自身の存在を再発見できて嬉しいと思う。そういった共助の領域で、純粋な行動から得られるものもJCではとても大切だ。そう思っているメンバーが全国にはたくさんいる。

『人間というのは、もともとその性は善である。

しかし、その善が表に現れないのは、容れ物である環境が劣悪であるからである。』

上杉鷹山

私たちは、震災での反省を踏まえ、共助の領域で多くの人たちが確実に実働できる防災ネットワークの拡充と強化を進めるべきである。そして、災害時に備える防災の備蓄パッケージであるJC-AIDの普及に力を注いでいきたい。この2つのシステムを構築することで、社会に期待され、信頼される組織へと進化していくことは間違いない。これは青年たちが創立から62年の長きに亘り、地域社会に貢献しうる運動を積み重ねてきたJCだからこそできるものである。私は共助の領域で自己実現を叶える人たちを応援したいと心から強く思う。

被災地での復旧、復興はまだまだ進んでいない。「時計の針」は少しずつ進んでいるように見えるが、時を刻む針の音は、まだまだ力強さを感じない。被災地の方々は、今見える未来から目をそらさず、恐れずに次の一步を踏み出している。私たちと共に歩いていくことで、夢や希望を叶えるべく、次の自分に成長できるのだ。今はまだ帰りたくても帰れない場所があり、小さくて弱い陽の光の中であり、見慣れない景色へと変わるかもしれない。しかし、必ず復興の先にある陽の光を浴びる場所は、優しい光であふれていると信じている。

だからこそ10年後、20年後に活かされるJC運動を見据え、真の復興がなされるその日まで、被災地に心を寄せる支援体制を整えていきたい。人と人、LOMとLOMがつながる支援を進め、被災地、そして日本の復興という「未来の地図」をしっかりと描いていこう。

日本人としての「道しるべ」

ここである意識調査結果を紹介したい。高校生に『自分の国に誇りをもっているか』の問いに「もっていない」と答えたのは48.3%だった。さらに『あなたの身の回りに「あのようになりたい」と思う大人がいるか』の問いに「いない」と答えたのは、小学6年生が19.8%、中学2年生が28.4%、高校2年生が30.5%であった。学年が上がるにつれて、自分の手本としたい大人がいなくなっていることが如実に顕れているのではないか。身近に手本となる大人がいない状況の中で自国に誇りをもてる子どもを育てるといふこと自体無理があるように思う。子どもは社会を映し出す鏡であり、まずは私たちが襟を正し、次世代に伝えていくべき日本人としての精神

的支柱を取り戻すことから始めなくてはならない。取り戻すべき精神的支柱、それは「日本固有の美德」を基盤とした道徳心だ。

明治初期の欧化主義に走った一時期を除き、わが国では「日本固有の美德」を基盤とした道徳教育が修身科を中心に学校教育の中で行われていたが、大東亜戦争終結後のGHQの統治政策によって消滅してしまった。未だ学校で十分な道徳教育が行われない最大の原因はここにあり、子どもたちの規範意識の低下が問題だと見受けられる反社会的な事件や事故は後を絶たない。見習うべき手本となる大人が不在で自分の未来を描けない若者が「自分さえよければそれでいい」「今さえ楽しければそれでいい」といった刹那主義に陥るのはむしろ当然かもしれない。子どもたちの生き方が刹那的になれば、社会の秩序は低下し、結果として活力までもが低下してしまうのだ。伝えていくべき道徳心は、子どもたちが学校生活や社会に出てから生きていくために、必要な規範であり、心の指標となる。そして、国家や地域への帰属意識を醸成させる自尊心や公共心、他を慮る心は、これから子どもたちが、グローバル化が加速する時代を生き抜くために重要な価値観なのである。子をもつ親として、地域社会を構成する責任世代としての義務を果たし、日本が世界に誇る「日本固有の美德」を子どもたちに伝えていこう。日本人に根付いてきた価値観である道徳心の醸成を、地域社会で育む運動として、地域の子どもたちは、地域で育てていくことを大人が自覚し、地域社会全体で次世代を担う子どもたちを守っていこう。「たくましい国」日本の創造には、多くの学びから培った自信と誇りからなる強さと、過去から引き継がれた日本人の道徳心からなる美しい精神性を兼ね備えた人財の育成が必要なのだ。

意気あふれる人財の増強

国や地域、さらには次世代のために活動する仲間が増えることは、この組織にとって大きな発展、強みにつながる。そして何より、各地域に同じ志をもったメンバーが少しでも増えることが、必ずや地域の発展やこれから生まれてくる子どもたちに明るい豊かな社会を残していけるものとする。全国の会員増強の最前線には、トップリーダーである理事長と会員増強担当者の背中がある。そして、地域への想いを伝える多くのメンバーがいる。本年も、ブロック会長には各地のニーズを集約し、卓越したリーダーシップを発揮していただき、組織力を活かして彼らを力強く応援して欲しい。現在、全国のメンバーの平均在籍年数は4年5カ月である。青年会議所という学び舎において4年、5年で卒業してしまうメンバーが増えてきているのが現状であり、20代、30代という貴重な青年期に多くの経験や機会を逃している同世代の方々がいるのは非常に残念なことである。特に私は、この学び舎で多くを経験し学んできた

からこそ、そう感じるのである。本年は、より多くの若さあふれるメンバーを迎え入れるために、若い世代をターゲットにした会員の増員を推進していきたい。

また、組織や地域、国家を主体的に牽引し、輝かしい未来に向けて弛まなく行動する意気あふれる人財を多く育成しなくてはならない。これまで、日本JC及びJCIが積み上げてきた各種プログラムを活用して、私たちが思い描く理想の社会を実現するために公共の担い手として自己研鑽に励む人財をより多く育てていきたい。常により良い変化を生み出すために学び、行動し続けることのできるリーダーたちが、互いのつながりの中で切磋琢磨し、輝かしい未来に向かって牽引しうる意気あふれる人財の強化が必要である。

活気に満ちあふれた地域による持続可能な社会の実現

現在、わが国においては急速に少子化が進行し、人口の減少と高齢化が同時進行している地域が数多く見受けられ、その現象は特に地方圏において切実な問題となっている。地域を自立的に活性化する取り組みが真に問われ始めている。地域における産業や生活空間としてのまちは、静態的に存在するものではなく、環境変化のもとで地域毎に変化を見せ、また同じ地域内でも時代と共に変わっていく。逆に、環境変化に対応できなければ産業もまちも空洞化する恐れがある。グローバル化などの国内外における環境変化は地域間及び都市間競争をも生じさせ、その結果として「都市」の空洞化が生じることは否めない事実である。グローバル化の進展など地域を取り巻く環境変化のもとで、地域経済の自立的発展に重要なのは、やはりその地域を構成する「人」ではないか。活気に満ちあふれた地域を創造するには、人が集うことから始めなくてはならない。地域の過疎化や高齢化は、日本全体の活力を低下させる問題であり、全国698の会員会議所が喫緊の課題として取り組まなければならない。地域のことを想い、愛する能動的な人々が多く集う地域は必ず活性化する。そんな人々が関わり集う仕組みづくりを継続していかなくてはならない。

これまで、地域に潜在する歴史的文化、人物、食材などをはじめとする資源を発掘し、多くの人々が関わり「地域のたから」へと昇華させてきた。その過程で多くの地域住民が関わり、企業参画を含めたコミュニティ活性化を促し、人と人、企業と地域をつなげた社会関係資本を生みだしてきた。次に注力すべきは、全国へ、世界へ向けて発信することではないか。同時に地域の起爆剤になりうる「地域のたから」であるのかを見直す機会も必要だ。真に社会関係資本というつながりが構築された「地域のたから」であるのか。「地域のたから」としての魅力を感じられているのか。資源の発掘、人、企業、地域の関わりなど、「地域のたから」へと昇華していく過程をチェック

すべき時期にきたと考える。今一度、プロセスイノベーションを起こし、地域の人々が魅力を感じ、地域の未来を共有できる「地域のたから」を生み出していこう。

エネルギーの地域資本化による持続可能な社会

これまで環境問題やエネルギー問題について議論を重ねてきた。京都議定書の発効や化石燃料の価格高騰、そして、福島第一原発事故によって、再生可能エネルギー、水、廃棄物、森林などの環境アセットへの注目が集まっている。特に、ソーラーや風力などの再生可能エネルギーの普及などは、地域性が極めて高い。私は、環境やエネルギーの問題を、地域と結びつけた議論にシフトチェンジしていきたいと考えている。持続可能な社会を実現するためには、地域資源のローカリゼーションが欠かせない。エネルギーをはじめとする地域資源を循環させることが、地域のコストを下げる。地域資源には、自然や生物などの自然資源、歴史的な建造物などの歴史的資源、それらを人の知恵や技術で活かした人的資源、地域の人たちの協働や信頼によるネットワーク、文化や暮らしなどの社会資源、貨幣や循環の仕組みをつくる経済資源、エネルギーを供給するインフラやパブリックスペースなどの物理資源などがある。こうした地域の資源が、そこに暮らす人々の生活と密接に関わり、経済的に循環することで、地域のマーケットフロントにつながり、マーケットの拡大や地域コストを下げる流れが生み出されるのではないだろうか。エネルギーや環境への取り組みを通して地域を活性化する手法を新たに模索し、活気に満ちあふれた地域の実現に向け、エネルギーの地域資本を次世代に残したい。

「JC版 新・日本風景論」

2013年6月22日、日本の自然信仰や独特の芸術文化の象徴として、富士山と三保の松原が世界文化遺産に登録された。多くのメディアが取り上げ、多くの国民が歓喜している姿は記憶に新しい。まさに「日本のたから」から、「世界のたから」へ昇華した瞬間であった。今では、富士山への登山者や三保の松原の景観を楽しむ人々がさらに増えているようだ。これにより多くの人々が関わり、自然との共生を生み出し、日本人、そして世界中の人々の心に深く根付くきっかけになったことは間違いない。私たちは、このように少しでも多くの「地域のたから」や「日本のたから」を国内はもとより、世界中へ、さらに次世代に発信し伝えていくべきだと考える。

日本が近代化を進める中で、当時の先達がエポックとして取り上げていたものに「日

本風景論」というものがある。これは、志賀重昂氏が明治初期クラーク博士のもと日本の近代を切り拓いた内村鑑三、新渡戸稲造らが学んだ札幌農学校（現北海道大学農学部）の第五期生として自然を愛し、人を愛し、自らを厳しく律する道を学んでいく中で、1894年（明治27年）に古典文学からの豊富な引用と、地理学術語を駆使し、日本の風土がいかに欧米に比べて優れているかを情熱的な文章で綴ったものである。この発刊は、日本人の景観意識を一変させた書物であった。各地域に存在する「地域のたから」を地域に住まうすべての人々が認識し、各方面へ広く知らしめるために、「JC版 新・日本風景論」を編纂したいと考えている。これには、「地域のたから」だけではなく、これまでの日本の歴史、特に近現代史を検証し、過去から未来へと続く日本人として大切にしなければならぬ伝統や文化、美しい精神性などを「日本のたから」として盛り込み、私たち責任世代の青年が次世代に残すべきもの、すべてをこれに集約していきたい。

地域を牽引する地域プロデューサーの育成

地域の活性化に向けて、これまでも多くの対策が実施されてきた。しかし、それらがすべて実を結んでいるかといえば、残念ながら特定の地域であったり、一定量、一過性においてであり、より精査され、細分化された対策を考えていく必要性を感じている。地域の疲弊は地理的条件や人口減少、大手民間企業の撤退や海外製品の流入による産業競争力の低下など、その度合いや性質が異なり、打開策も様々にあるべきだと考える。しかし、行政が行う政策だけではそれが画一化されやすく、課題別解決といった視点からは非効率な状態と言わざるを得ない。これからの地域活性化において重要視すべきは、その土地においての課題と原因を分析し、地域ごとの特性を活かしながら、自ら解決に向けて行動する人財の育成ではないか。広い視野と深い見識、卓越した想像力と豊かな人間性を身に付け、常に社会への問題意識と確固たる使命感をもち、積極的、主体的に行動できる地域のプロデューサー、つまり地域の核となる人財の育成が必要なのである。本年も、特色あるそれぞれの地域特性を踏まえつつ、地域独自の育成手法によって、意気あふれる地域プロデューサーが全国各地に誕生し、活気に満ちあふれた地域へ導いてくれることを強く願っている。

恒久的世界平和の実現に向けて

世界に目を向けてみると、紛争や貧困、環境問題など多くの問題が山積しているのが事実である。私は、これらの問題を解決できるカギを握っているのは日本人ではな

いのかと考えている。東日本大震災が発災し、災害に遭いながらも日本人としての礼節を重んじ、他を慮る心を示した人々を、誇らしく思ったのは私だけではなかっただろう。また、その姿に対して世界各国から賛辞の声が贈られたことは記憶に新しいところだ。あの時「世界が注目していた」のは、日本人の美しい精神性であった。日本が今日のすさまじいグローバリゼーションの荒波の中で、これまで通り生き残っていくためには、今、改めて日言の自画像を日本人一人ひとりが再認識し、日本らしさを追求すべきではないか。JCIにおける国家青年会議所としての立ち位置をしっかりと自覚し、リーディングNOMとしての責任を果たすべくメンバー一人ひとりが、「和を以て貴しとなす」の精神でJCIとの連携の中で民間外交を行っていくと共に、「世界に誇る日本文化」を国際交流の中で発信していただきたいと考えている。

また、世界にある8つの課題解決を目的として、各国が取り組んできた国連ミレニアム開発目標（UNMDGs）は、2015年に目標達成の期限を迎える。JCIと国連とのパートナーシップにおいて、特に注力しているマラリア撲滅に向けた運動であるJCI NOTHING BUT NETS キャンペーンを本年も力強く推進しなければならない。これまで以上に多くの方々へ普及させる仕組みを考え、確実に実行していくと共に、これからを担う子どもたちに国際社会が抱える多くの課題に対して取り組む姿勢を養い、グローバルな視点で行動できる担い手を育てていきたい。

近隣諸国との未来志向な関係

今や世界中が相剋に関連し依存し合っていることから、世界の平和と繁栄なしにわが国の平和と繁栄はありえない。これまで日本青年会議所も民間外交の一翼を担ってきたが、その目的は様々な国の人々との友好、相互理解を推進することにより世界の平和と繁栄に貢献することに他ならない。今後も人と人との心通う交流を積み重ね、信頼関係を築くことで互いを理解し合う気持ちを育てていき、国際社会の中でポジティブに影響を与え続ける国でありたいと願う。長年に亘りこれまで継続してきた、個人レベル、地域レベルのより深く好意的な民間交流は、アジアの安寧に貢献するものであると確信している。アジア諸国との青年らしく爽やかな国際交流を本年も引き続き行っていきたい。

また、アジアの安寧に欠かせない中国との関係構築には、井戸を掘り、交流を継続されてきた先達に感謝しながら、引き続き未来志向な関係構築に向け協働していきたい。現在、中国との間には領土・領海問題や歴史認識問題などの課題を抱え、友好的な関係が構築されていないのが実情であり、2009年に策定された「日中中期ビジョン5ヵ年計画」に基づいて進められるべき友好的な交流が進んでいないのが現状で

ある。カウンターパートである中華全国青年聯合会と、今後も未来志向な関係が築けるよう日中友好の会と連携を図っていくと共に、「日中中期ビジョン5カ年計画」に代わる新たなビジョンを描く1年にしていきたい。日本と中国の未来志向な関係構築がアジアの安寧につながると確信している。

そして、加速度的に外交が進むロシアにおいての関係も注力していきたい。3年前、私はロシアを訪れた時、衝撃を受けた。アメリカとの冷戦時代やあまり交流が無かったロシアの印象は、私にとってすべてが「冷たい」というイメージだった。しかし、ロシアの学生との交流や、ロシアを訪れてみるとそのイメージとは全く違っていた。緑があふれ自然豊かで、建物や街の景観もとても美しく色鮮やかで、一人で街角に立っていると「何か困っているのかい。」と親切に声をかけてくれる人ばかりで、とても「温かい」印象を受けたのを記憶している。国と国との政府間交渉では、国策として北方領土返還に向け少しずつ動き出そうとしている。そんな中で、私たちが長年に亘り民間外交を担ってきた役割を今一度、大きく昇華させる絶好の機会ではないかと考える。北方領土返還に向けた運動の一環として未来志向な関係を構築すべく、これまで進めてきた日本とロシアの学生による交流を引き続き進めていくと共に、北方領土返還後のビジョンを描いていきたい。とても温かみを感じるロシアの国民とどのような関係を構築していくべきか、共生していくべきかを民間レベルで考えていかなければならない役割を担っているのは、私たち責任世代の青年である。

日本のファンを世界中に

2013年のJCI ASPAC光州大会のハンドオーバーにて、ASPAC大会旗が日本に渡された時、胸が高鳴る想いだった。そう、2014年は、JCI ASPACが山形の地で開催される。アジア各国のメンバーを迎え入れるにあたり、開催地である山形青年会議所を最大限支援していかなければならない。ホスト側である日本のメンバーには、この機会をチャンスとして捉え、参加するすべてのメンバーがより多くのものを享受できるよう、大会や企画、設営などに主体的に関わっていただきたい。

また、これまで世界各国のNOMのリーダーを育ててきた国際アカデミーにも多くの日本のメンバーに新たな刺激や価値観を創出する機会として参加いただくと共に、世界各国のリーダーたちと強固なネットワークづくりに努めていただきたいと強く願っている。そして、この二つの機会で日本のファンをアジア各国はもとより、世界各国に増やすことができれば、どんなに素晴らしいことだろう。参加するすべての海外メンバーにはもちろんのこと、その参加したメンバーが自国に戻ってから、それぞれ

の国民に日本の素晴らしさを伝えてもらえるよう大会、事業を構築していきたい。さらに、より多くのメンバーに参画いただき、アジアへ、そして、世界へポジティブに影響を与えていきたい。青年らしい爽やかな交流を各国のメンバーと共に行い、2015年に開催されるであろうJCI 世界会議金沢大会への物語を描いていきたい。

強固なネットワークを活かしてLOMと共鳴する運動

現在、メンバー数の減少、さらなる会員の成長が喫緊の課題となっている。まさに組織が痩せてきたと言えるのではないだろうか。この現象が経済情勢の悪化だけでは割り切れないことは、多くのメンバーが知っているはずである。青年会議所という組織自体の魅力を実感できないメンバーの増加や、地域の人々のニーズの多様化に起因しているのだと考える。まさに青年会議所の存在意義が問われていると理解できる。青年会議所は、40歳までという限りある時間を共有し、夢を語って互いに切磋琢磨し、刺激し合いながら、人間としての魅力を高めていく団体である。つまり、私たちは人々の意識を変えていくJCという運動体を通して日々学び、考え、行動しているのだ。

日本JC本会・各協議会への出向を通して、自己の成長と地域や国や世界の発展のために、多くのメンバーが多種多様な価値観で物事を多面的な視点で捉えることのできる人財へと成長する機会につなげていただきたい。大きなフィールドであなたの力を存分に発揮していただきたいと強く願っている。意気あふれる人財を育成するために、日本JC本会・各協議会は、出向するメンバー一人ひとりが必ず成長する機会となるよう組織を運営していきたい。役職を担うものは、次なる人財を育てることを忘れず、全国各地の次代を担うリーダーを発掘し、育てて欲しい。そして何より、すべての活動、運営は各地会員会議所やメンバーのためにあることを忘れないで欲しい。青年の運動は、間違いなく各地会員会議所が原動力であり、日本JCは、全国の地域が抱える課題に対して、協働して取り組むべき課題を抽出して応援していきたい。また、これまで日本JCは、本会と各協議会が一体となって各地会員会議所の応援団としての役割を果たしてきたが、これまでの組織運営や事業の構築を見直すべく、日本JC本会・各協議会が担うべき役割を今一度検証し、活気に満ちあふれた地域の実現に向けて運動する各地会員会議所を力強く応援し続ける組織へと進化させていきたい。

さらに、全国698会員会議所の強固なネットワークを活かした運動をこれまで以上に力強く推し進めたい。35,000人に及ぶ青年経済人の声を背景に、組織力を活かし、社会にインパクトを与える本気の市民意識変革運動を展開していくために、

LOMと共鳴する一年にしたいと心から願う。

結びに

「人は城、人は石垣、人は堀。」

すべてのものごとの始まりは私たち人からなのだ。私たち自身の成長こそが、社会を変革する原動力となり、次世代に誇れるものを残していけるのだと考える。しかし、一人ひとりの成長が様々な方向に拡散し、組織の進化につながらないということが起きてはならない。組織全体が進化するためには、一人ひとりが一つの方向に向かって成長していくことが必要になる。まずは、メンバー一人ひとりが同じベクトルに向かって学び、経験の中から成長するという姿勢ですべてに向き合うことが重要なのだ。学ぶ姿勢が、国や地域、さらには次世代のために何かを考え、最高の価値を創り出すことにつながると信じている。意気あふれる人財への成長と、強い組織への進化を起こしていこうではないか。

「すべての出会いは偶然ではなく必然的なものであり、必ず意味がある。だから、この一瞬を大切にしたい。二度とないこの一瞬を大切にしたいと願う。」

この言葉を胸に、多くの出会いの中で、私はどれだけ成長できたことだろう。青年会議所という学び舎において、一つひとつ積み重ねるそのすべては、自分を成長へと導いてくれていることを確信している。

共に学び、考え、決意し、行動しよう。

美しき日本の輝かしい未来に向けて、羽ばたこうではないか。

意気あふれ、活気に満ちあふれた「たくましい国」日本を次世代に引き継ぐために。

公益社団法人日本青年会議所
2014年度 基本資料

基本計画

(基本理念・基本方針)

基本理念

志高く未来へ

意気あふれる人財による

「たくましい国」日本の創造

基本方針

1. 未来を切り拓く国民意識の確立
2. 意気あふれる人財の育成
3. 活気に満ちあふれた地域の創造
4. 日本の精神性による民間外交の推進
5. 人と共に進化する強い組織の創造

近畿地区協議会基本方針

人と地域が共鳴する近畿の実現

近畿地区担当常任理事 西村 忠浩

日本有数の歴史遺産を守り、伝統・文化を大切にしながら民主導で独特の経済圏を繁栄させてきた近畿は、道徳心の低下や社会に無関心な人の増加、急激なグローバル化などの環境変化が進行し、地域から活力が失われています。私たちが活気に満ちあふれた地域を自立的に発展させるには、多くの経験から広い視野や深い見識を学び、卓越した想像力と豊かな人間性をもって、国際社会で活躍できる人と地域が共鳴する近畿の実現が必要です。

まずは、地域から日本の未来を切り拓くために、本会の事業・運動を会員会議所へ推進します。そして、経済資源を循環させ再び地域に活力を取り戻すために、日本の矜持に立脚した技術力をもち、グローバル市場で経済成長の担い手となる人財を育成します。さらに、自己の成長による地域の発展のために、国際社会の多種多様な価値観で多面的な視点をもち、アジア諸国と未来志向な関係の始点となるGTSを実施します。また、地域を愛して活動する人々と想いを共有するために、意気あふれる人財を発掘し、活動の成果を称賛する近畿地区版人間力大賞を実施します。そして、子どもたちに道徳心を育むために、地域社会全体で子どもを育てる運動を推進します。さらに、持続可能な社会を構築するために、より地域に根差した環境とエネルギーの議論を展開し、そこに住み暮らす人々の行動を喚起します。また、被災地域の復興のために、今必要とされる復興支援活動を実施します。そして、多くの人が集い地域の輝かしい未来を描くために、白浜田辺のもつ地域の魅力を最大限に活かし、開催地から近畿全てに活気が満ちあふれる地区大会を開催します。

経験することで得られる学びを通して成長した意気あふれる私たちが、グローバル市場を主体的に牽引するリーダーとして、地域経済を自立的に発展させ、活気に満ちあふれた地域の再生から、人と地域が共鳴する近畿を実現し、「たくましい国」日本を創造します。

<事業計画>

1. 本会の事業・運動の推進
2. グローバル市場におけるリーダーの育成と経済資源の調査・研究
3. GTS(グローバルトレーニングスクール)事業の実施
4. 近畿地区版人間力大賞の実施
5. 地域社会で道徳心を育む運動の推進
6. 持続可能な社会に向けた環境・エネルギーの調査・研究・推進
7. 復興支援活動の実施
8. 近畿地区大会白浜田辺大会の開催
9. 【地区連】多くの人が実働できる防災ネットワークの拡充・強化
10. 【地区連】本会と連携した会員拡大の実施
11. 【地区連】地域資源に関する全地区との情報交換会の実施
12. 【地区連】UN MDGs認知向上プログラムの推進・実施

京都ブロック協議会 事業計画

人と地域が共鳴する京都の実現

京都ブロック協議会 会長 張本 昌義

千年以上に亘り都であった京都は、歴史と伝統を継承し、世界に誇れるまちとして発展してきましたが、地域経済の低迷により主権者の当事者意識の希薄化や限界集落による文化継承が厳しくなり地域力の低下が懸念されています。今こそ、責任世代の私たちが、社会への問題意識と国際社会に寄与する使命感をもち、地域を愛する人々と共に文化が薫る活気に満ちあふれた地域を再生させ、人と地域が共鳴する京都を実現する必要があります。

まずは、地域から日本の未来を切り拓くために、本会の事業・運動を会員会議所へ推進します。そして、政策本位による政治選択を浸透させるために、マニフェスト型公開討論会の実施や「e-みらせん」を運用します。さらに、輝かしい地域の未来に寄与するために、本会と連携した会員拡大ツールを活用し、会員会議所の会員増強を支援します。また、意気あふれる人財を育成するために、未来に向け弛まなく行動できるリーダーを育成するブロックアカデミー事業を実施します。そして、国際社会で民間外交の一翼を担うために、アジアの人々と相互理解を推進する国際交流推進事業を実施します。さらに、京都の経済を牽引する人財を育てるために、市民と共に地域経済の創意力を啓発するフォーラムを実施します。また、文化が薫る地域の未来を描くために、地域資源を活かした市民参加による京都ブロック大会を開催します。そして、市民によってこの国のあるべき姿を描くために、憲法論議が深まる啓発事業を実施します。さらに、有事の際に備えるために、諸団体と連携し、広域災害に対し実働できる防災ネットワークの拡充と強化に取り組みます。

地域社会を取り巻くグローバル化する環境の変化を課題化し、解決に向けて行動する意気あふれる私たちが、地域経済を自立的に発展にさせ、文化が薫る活気に満ちあふれた地域の再生から、人と地域が共鳴する京都が実現され、「たくましい国」日本を創造します。

<事業計画>

1. 本会の事業・運動の推進
2. 選挙におけるマニフェスト型公開討論会と実施と「e-みらせん」の運用
3. 会員拡大の推進・支援
4. ブロックアカデミー事業の実施
5. 国際交流推進事業の実施
6. 京都の経済を牽引する人財を育てるフォーラムの実施
7. 京都ブロック大会の実施
8. 【プロ連】国民参加型による憲法に関する事業への参加推進及び発信

2014年度 公益社団法人乙訓青年会議所
理事長所信

公益社団法人乙訓青年会議所
理事長 予定者 田中俊幸

はじめに

私たちは現在、長い不況の中に居ながらも、物質的には大変豊かな暮らしをしています。しかし、豊かさを実感できずに閉塞感が漂っている様に思います。人との関わりが無くても生きていける社会にこそ必要なものは、人が互いに敬い合える心の豊かさでは無いでしょうか。心の豊かさとは、日本の良き伝統や精神文化の中にあり、自己研鑽やおもてなしの心に学ぶ事が出来ると考えます。この混沌とした時代だからこそ、我々が心を豊かに気概を持って、率先して明るい未来を創り出して行かなければなりません。

乙訓青年会議所は、「この乙訓^{まち}を良くしたい」という熱い想いを持った多くの同志が集い誕生しました。多くの先輩方が我々と同じように、明るい豊かな社会の実現を目指し活動を続けられ、その情熱と高い志が脈々と受け継がれ、本年35年目を迎える事が出来ました。先輩諸兄の掲げられた2020年ビジョン「地球市民意識あふれる乙訓^{まち}」を旗印に、2004年には「人づくりから始まる誇りある乙訓創り」、2009年には『笑顔があふれる「市民が主役」の乙訓創り』と言う中短期行動指針を掲げられ、青年会議所運動を展開してきました。35周年を迎える本年度は、過去の検証を踏まえて新たな行動指針を打ち出し、地域の発展に寄与すべく運動して行かなければなりません。その為に、乙訓青年会議所メンバー一人ひとりがJAYCEEとしての気概と先輩諸兄から受け継いだ志を胸に、負託と信頼に応え続けていく必要があると考えます。

不動心、未来への原動力となれ

私はJC活動と合わせて茶道を習い、日本独自の伝統文化やその精神を学んでいます。その教えには、JAYCEEとして持つべき心の在り方と共通する物が数多くあると感じています。茶道の心を表した言葉に「和敬清寂^{わげいせいじゃく}」と言う言葉があります。この4つの文字には、全ての茶道の心が込められていると言われています。「和」とは、文字通り人と人との和を表し、心を開いて付き合う事の出来る友情を表しています。「敬」とは尊敬を表しお互いを敬い、礼を尽くすと言う事を表しています。「清」とは裏表のない清らかな心である事を表しています。「寂」とは、和・敬・静を通して実践し、その中でどんな困難にも負けず、揺るぎない不動の心を得られると言う事を表しています。茶道の心として知られているこの言葉ですが、私はこの精神をリーダーが持つべきものとして重ね合わせ、まちの未来を見据えて活動していく事が必要だと考えます。我々が不動心を心に宿し、自信と誇りを持って取り組めば必ず明るい豊かな社会の実現に繋がるはずです。

明るい豊かな社会を実現する為にまず必要な事は、志の高い人物の形成では無いでしょうか。私の考える明るい豊かな社会とは、真剣にまちの事を考えて行動し、他人の事を思いやる気持ちを持った人物が集うまちです。人を敬い、礼を尽くして感謝の心で人々が接する社会に争いは起きません。裏表の無い清らかな心で人々が集えば笑顔が溢れ、信頼出来る人間関係を築く事が出来るのです。そんな素晴らしい乙訓^{まち}を実現する為に、メンバー全員が不動の心で地域の原動力となって行動し、地域の方々と共に未来への礎を築いていく事が我々の使命であると確信します。

35周年の感謝を胸に活気あふれる乙訓を実現しよう

乙訓青年会議所は本年、創立35周年を迎えます。35年もの間継続する事が出来たのは、先輩諸兄が様々な困難を乗り越え、熱い想いで行動し続けられたからです。我々現役メンバーは、脈々と受け継がれてきた創始の精神と先輩諸兄の志を受け継ぎ、誇りと感謝を胸に、新たな歩みを進めて行かなければなりません。素晴らしい乙訓青年会議所を継続する為に、そしてメンバーそれぞれが成長する為に、和・敬・静を持って不動の心で実践する必要があります。

この素晴らしい乙訓地域で活動する我々の運動は、先輩諸兄をはじめ多くの方々に認識して頂いています。35周年記念式典では、乙訓青年会議所の先輩諸兄や各地で活動されている同志の方々に対し深く感謝すると共に、乙訓青年会議所の新たな5ヵ年行動指針を掲げその方向性を示します。

乙訓青年会議所では、二市一町の行政、関係諸団体、地元企業と連携を図り、地域の活性と郷土愛を育む事業を行って参りました。35周年記念事業では、継続してきた関係を更に深め、地域コミュニティの活性化に向けて取り組みます。多くの方が様々な気付きや学びを得るだけでなく、活気に満ちあふれた乙訓の未来を共有できる事業、それが乙訓青年会議所の行うべき記念事業です。様々な気付きや学びを得られる記念事業を成功させるには、乙訓青年会議所メンバーだけでは到底実現出来ません。だからこそ必要になるのは二市一町の行政と、地域を見つめ、素晴らしい乙訓にしようと活動されている関係諸団体の協力です。これまで築いてきた絆を更に深く、太い物にしなが、この事業に関わる全ての方が一つになって取り組む必要があります。その結果、乙訓地域を輝かせる新しいネットワーク構築のきっかけになるのが、この35周年記念事業なのです。この事業を発展、継続させる事で2020年ビジョンの達成に近づき、創立当初から我々が目指す明るい豊かな社会へ繋がると確信します。

三位一体の乙訓を創造し運動を広めよう

素晴らしい乙訓を創造する為に、乙訓地域では様々な団体がまちづくりに繋がる活動を展開されています。この活動は自然保護、環境問題への取り組みや観光、まちおこし活動など様々です。我々も地域の方々と同じく素晴らしい乙訓の創造を目指し、まちづくり活動を継続して行う事が必要です。

乙訓青年会議所では、まちづくり事業として長年にわたり水辺フェスティバルを開催して参りました。水辺フェスティバルでは、関係諸団体、行政、市民が三位一体となって活動するきっかけになりました。この事業は、乙訓地域の郷土愛を育み、地域コミュニティの醸成に繋がったものと確信しています。しかし、単年度制である青年会議所メンバーは、地域の方々と関係を継続する事に大変苦労を重ねて参りました。今後更に素晴らしい乙訓を創造する為に、我々青年会議所と関係諸団体の方々が、お互いの個性を尊重し合いながら同じ目標を定め、歩む事の出来る新しいネットワーク構築を目指す事が必要です。新たなネットワークとは、まちづくり活動をしている様々な団体が集い、より良い乙訓を創造する為に前向きに行動する集りです。この集まりがあれば、常に同じ目標に向かって歩む事の出来る、素晴らしいまちづくりに繋がると確信しています。このネットワーク確立を目指し、行政と地域で活動されている諸団体との連携を更に強化すべく、相互理解を深める機会を創出して参ります。まちづくり活動を通し、乙訓を愛し行動する主人公を増やしていく事で、人との繋がりが和となり、まちづくりへの大きな波となって市民意識の改革を促し、明るい豊かな社会の実現に繋がると確信します。また、未来のまちのあり方を積極的に考える機会を提供すべく、公開討論会を推進し、地域の大人が責任を持って将来を選択する、市民主導型社会へと繋がります。

乙訓地域には我々青年会議所をはじめ、地域を愛し、地域の為に活動している団体がたくさん存在します。それぞれの団体がまちの為に、人の為に活動されているのですが、その素晴らしい活動を知らない方が沢山おられます。明るい豊かな乙訓を築き上げる為に、それらの素晴らしい活動を、少しでも多くの方々に周知させ

る必要があります。この活動を知って頂く事が、意識改革の一步に繋がり、また、我々の活動に対し理解を深めて頂ける事に繋がります。様々な活動を知って頂く為に、長年にわたり作成してきた広報誌を継続させ、行政や関係諸団体との連携を深めると共に地域諸団体に対しても発信し、我々の運動を広めて行く必要があります。また、引き続き地域で活動されている関係諸団体の取り組みを掲載する事は、連携の強化と市民に対し、各種活動への参加促進に繋がります。広報誌の他に現在は様々な情報端末があります。中でもホームページ、SNSを利用する事で青年会議所運動の必要性を、積極的にアピールする事が出来ると考えます。それぞれの長所を生かし、乙訓青年会議所の「今」を伝え、青年会議所運動の取り組みやメンバーの姿を発信すれば、市民の方に広く理解を深めて頂く事に繋がります。また、メンバーに対しては、事業目的や内容をしっかりと理解して頂き、各委員会との連携を図る事が出来ます。まちづくり活動の一環として一昨年前より行ってきた地域振興検討会は、三位一体のまちづくりを行う上で重要な事業と捉えて取り組み、継続させていく必要があります。この検討会を通じ、関係諸団体の事業を発展させるだけでなく相互理解を深める事で、今後の活動にとって重要な絆を築く事が出来るはずで、地域に根差した公益活動を行う我々が、まちづくり運動を発展させる事で、乙訓青年会議所の存在意義向上に繋がると確信します。

青年会議所にはJCIをはじめ、日本青年会議所、近畿地区協議会、京都ブロック協議会と様々な組織が外向という形で運営されています。各地で行われる組織に外向する事は多くの時間を作り、調整する必要があります。しかし、これをチャンスと捉え挑戦する事で、沢山の友情を育み多くの気付きや学びを得る事に繋がります。外向メンバーの経験を乙訓青年会議所の運動に活かす事で、人だけでは無く、組織としても成長を遂げる事が出来るものと確信します。

まち 乙訓の主人公を育て未来を担う子ども達を育もう

明るい豊かな社会とは、「自分さえ良ければ」と考えず「人の為」に行動できる道徳心、主体性と実行力を兼ね備えた人々が集まっていると考えます。我々乙訓青年会議所メンバーは、その様なまちの主人公を創造する為に、自分自身が背中で示すべく、裏表の無い心でお互いを敬い、和を持って不動の心で実践する事で、成長を続ける必要があります。

青年会議所の理念である明るい豊かな社会を実現する為に、人づくり運動は欠かす事が出来ません。その為に乙訓青年会議所では、地域の方々にとって学びの場となるオープン例会や、人間力向上の機会を数多く提供してきました。今年度も人間力向上を目的としたオープン例会を開催し、公益な団体である事を理解して頂くと共に、地域に住まう方々がお互いを敬い、活気に満ちたまちの創造を目指し、活動します。人間力とは、道徳心、主体性と実行力を兼ね備えた人だと考えます。まずは市民の方々に、そして我々自身が志高い人格を形成する為に、和敬清寂の心に繋がる道徳心を学んで頂きます。道徳心を向上させる事で、人を敬い常に周りの事を考えながら行動出来る人物になれると考えます。また、活気に満ちあふれた乙訓にする為に、人々を魅了するリーダーシップについて学んで頂きます。人々の先頭に立って自ら実践出来るリーダーシップが備われば、多くの方々が同じ方向を向いて行動する事の出来る素晴らしい地域になるはずで、そして我々は、青年経済人として、組織力を向上させる為の自覚を学ぶ必要があると考えます。組織力とはどんな困難になっても、逃げ出す事無くまとまって活動出来る実行力です。この実行力が向上すれば、あらゆる困難を克服する事が出来るはずで、青年会議所の想いを伝えるオープン例会では、我々の活動を肌で感じて頂く事で、市民意識の改革を促し、いきいきとした活力ある人づくり運動に繋がると考えます。また、揺るぎのない信念を得る為に、自ら進んで修練を積む事業も実施して参ります。明るい豊かな乙訓を形成する、人間力溢れる主人公となるよう意識改革を行う事で、我々は一人のJAYCEEとして資質を高め、地域のリーダーとなりどんな状況においても不動の心で挑む事が出来ると確信致します。

まちを形成するのは人であり、まちを輝かせてくれるのは今を生きる子ども達です。しかし、少年非行や不登校問題、学級崩壊など青少年を巡る問題は深刻な状況に陥っています。その要因は親や大人、社会の在り方が大きく関わっているのではないのでしょうか。子ども達は与えられた環境の中で、私達大人の背中を見て成長していきます。子ども達を取り巻く環境を整えて行くのが親であり、地域の大人である私達です。私達大人が今一度道徳心を養い、慈愛の心を持って子ども達とコミュニケーションを図り、理解を深める必要があります。乙訓の宝とも言うべき子ども達の愛郷心を育てる為に、子ども達の模範となる事が、我々青年会議所メンバーの責務であると考えます。乙訓青年会議所では、毎年地域の小学生が集う文化少年団事業を開催しています。小学生とは言え、1年生から6年生までと年齢差がある子ども達が集うこの事業は、子ども達にとっても、様々な気付きや学びを得られる場となっています。小さな子どもに対する気遣いや、模範となるべき大人達の背中を見て行動する事など、この事業は子ども達の人間性を養う素晴らしい機会となっています。この事業を継続して行う事で、我々大人達も見習われるべき大人として、自分自身を律する必要があると気付く事が出来ます。この気付きと実践を継続する事が、メンバー自身の成長に繋がる物と確信します。乙訓青年会議所では、乙訓ふるさとふれあい駅伝、ケイジャーズカップなど多くの青少年育成事業を行って参りました。本年度も行政、関係諸団体そして地域の方々と共に、多くの可能性を秘めた子ども達の健やかな成長を促し、未来を担う青少年の健全な育成に努めて参ります。

魅力ある仲間を増やし友情を育もう

乙訓青年会議所は近年60～80名の会員数で活動していますが、昨年15名のメンバーが卒業し、本年度は12名が卒業を迎えます。組織にとって会員数の減少は目的達成に向けた事業を実施する事が困難になるばかりか、組織の運営にも影響を及ぼします。また、市民意識の改革を行い、人づくり、まちづくりを推進している我々は、この活動を広げる為にも、同志である志高いメンバーを一人でも多く増やす必要があります。

青年会議所運動の魅力とは何でしょうか。私が考える青年会議所運動の魅力は、三信条で掲げる「奉仕・修練・友情」の体現です。私達は奉仕活動をする事で、街の方々から感謝の言葉を頂き、また街の方々も一緒になって活動する事で、素晴らしい関係の構築に繋がっています。奉仕活動では自分自身に課題を課す事で、苦労の中から多くの気付きや大きな学びを得る事が出来ます。この活動に真剣に取り組み、切磋琢磨する事で育まれる友情は何にも代えがたい、大きな絆となります。青年会議所運動を通じて得られる感動は、メンバー全員が必ず今迄に感じ取った事があるはずで、この感動を知るメンバーの魅力が伝われば、必ず会員拡大に繋がると確信します。素晴らしい青年会議所運動を継続して行う為に、メンバー全員が率先して、和敬清寂の心を胸に、会員拡大活動に取り組まなければなりません。また入会するメンバーに対して、活動の楽しさや受け継がれてきた志と共に青年会議所運動の意義をいち早く理解してもらえるよう伝える事が重要です。まちづくり、人づくりの為に、自分自身の修練の為に、そして固い絆を構築する為に、強い意志を持って取り組みれば、必ず会員拡大を達成出来ると確信します。

様々な奉仕活動や、まちづくり活動を行っている我々青年会議所メンバーは、それぞれの事業目的達成の為に、メンバー同士が協和し組織内部を充実させる事が必要不可欠です。また、メンバー同士が刺激を合い、切磋琢磨するからこそ信頼が生まれ、それぞれの成長に繋がるものと考えます。会員間での親睦は、相互理解を深め絆の構築に繋げる事の出来る絶好の機会であり、この絆の構築が仲間を成長させる原動力になっていると考えます。この親睦の場を、素晴らしい場に設える事も、自分自身を大きく成長させる修練の場と捉える事が出来ます。相手の立場を理解し、尊重するおもてなしの心を持って行う準備や、演出に真剣に取り組む事、これこそ大きな学びを得られる場ではないのでしょうか。交流で得られるメンバーの成長と固い絆を構築する為に、高い意識で設える事が求められます。また、設えだけでは無く、自分自身も多くのメンバーと絆を構築する事も

大切な活動の一つです。表面上の付き合いでは無く、仲間の事を心から叱咤激励出来る関係の構築が、本当の絆づくりなのです。会員交流の場を通じ、今まで以上の信頼関係を築き上げ、絆を深める事で組織力の向上に繋がると確信致します。

信頼性のある運営を行おう

国の公益法人制度改革を受け乙訓青年会議所は、公益社団法人として認可され、数年が経過しました。公益社団法人として、この組織の運営方法や予算の執行に関しても、その責任を自覚し市民の方々にとって透明で、分かり易い運営をしなければなりません。

乙訓青年会議所では、公益法人格取得前から、予算編成、執行に関するチェックや、コンプライアンスに対する意識を高め、運営への組み込みを行って参りました。その結果、予算編成、予算執行の審査、コンプライアンスに関する審査を適正に行う事が出来る様になっているのは周知の事実です。今や公益社団法人である我々は、この様な運営方法を正しく執行する事は当然の事と言えます。この管理体制を継続出来る基盤を整える事が、今の乙訓青年会議所に最も必要であると認識しています。管理体制を継続する中で最も力を入れるべきは、財務体制のより正確な引き継ぎです。その為に、財務専用の引き継ぎマニュアル作りを進めて参ります。また、意識の高い会議の運営も必要不可欠です。より素晴らしい事業にする為に、事前に内容を把握した状態で会議に挑む取組みで、濃密で実り多い会議を実現して参ります。地域に根差した公益団体として、また、継続出来る強い青年会議所を作り上げる為に、新たな取組みで運営を推し進めましょう。

むすびに

我々は乙訓青年会議所という青年の学び舎で、それぞれが自分自身と向き合い、自分に足りないもの、必要なものを認識し、自身の成長の為に全力で活動しています。この青年の学び舎に入会したきっかけや動機は人それぞれであり、入会当初は何も分からない所から始まります。しかし、青年会議所活動を行っていくうちに損得では無く、人の為、まちの為に動く事が自分の意識改革になり、自分自身の成長に繋がると言う事を実感して行くのだと思います。私自身も、これまでの青年会議所活動を通して、多くの先輩から「面白く、楽しく、為になる」それが青年会議所であると教えて頂きました。そして、多くの人々と出会う中で、楽しさや成長する大切さ、喜びを知りました。それらを体感するには、メンバー一人ひとりが積極的に高い意識を持って事業に参画し、自ら真剣に取り組み、ベストを尽くす事が重要です。35周年を迎える本年度は、成長の場面が数多くあるはずです。高いハードルである事が分かっている、感謝を胸に不動の心でメンバー全員が同じ方向を向き、想いを一つにして努力して行きましょう。全ての運動に全力で取り組み、一所懸命やるからこそ、メンバー同士が支え合い友情が生まれ、どんな困難も乗り越えられる組織の力になると確信しています。感謝を胸に、活気に満ちあふれた乙訓^{まち}を目指して……。

2014年度 公益社団法人乙訓青年会議所
スローガン・テーマ

【スローガン】

不動心！未来への原動力となれ！

【テーマ】

-感謝を胸に活気あふれる^{まち}乙訓を目指して-

2014年度 公益社団法人乙訓青年会議所
基本理念・基本方針

【基本理念】

新たな5ヵ年行動指針に基づいた活動

不動心を磨き高い志を持った組織を目指す

まちの主人公が集う活気あふれる^{まち}乙訓の創造

【基本方針】

35周年の感謝を胸に活気あふれる^{まち}乙訓を実現しよう

三位一体の^{まち}乙訓を創造し運動を広めよう

^{まち}乙訓の主人公を育て未来を担う子ども達を育もう

魅力ある仲間を増やし友情を育もう

信頼性のある運営を行おう

2014年度 公益社団法人乙訓青年会議所

事業計画

(1) 青少年育成、教育文化スポーツ交流事業

文化少年団事業 年9回の開催

乙訓ふるさとふれあい駅伝の参画協力

青少年育成研修事業の開催

(2) まちづくり事業

乙訓水辺フェスティバル事業の開催

まちづくり事業の開催

二市一町地域検証会の開催

(3) 地域経済及び地域振興の研究、研修事業

経営研修事業の開催

地域振興検討会の開催

ひとづくり研修事業の開催

(4) 会員交流及び組織維持目的事業

会員交流会の開催

会員拡大を目的とした説明会等の開催

新人会員の勉強会の開催

(5) その他、本会の目的を達成するために必要な事業

35周年記念式典及び記念事業の準備

新5カ年行動指針の検証及び次代へ向けた行動指針の構想

(6) JCI・公益社団法人日本青年会議所・近畿地区協議会・京都ブロック協議会への参加・協力

JCI: ASPAC・世界会議

公益社団法人日本青年会議所: 京都会議・サマーコンファレンス・全国会員大会

近畿地区協議会: 近畿地区大会・各種事業

京都ブロック協議会: 京都ブロック会員大会・各種事業

2014年度 公益社団法人乙訓青年会議所
委員会・会議体活動計画

1. 全委員会・会議体

- ① 35周年記念式典及び記念事業の実施
- ② 会員拡大活動と会員拡大委員会への連携と協力
- ③ まちづくり事業、青少年育成事業への参加・協力

2. 「35周年の感謝を胸に活気あふれる乙訓(まち)を実現しよう」

(35周年特別委員)

- ① 4月メモリアル100%出席例会の開催
- ② 35周年記念式典及び記念事業の開催
- ③ 9月例会の開催
- ④ 新たな5ヵ年行動指針の発表
- ⑤ 35周年記念誌の発刊

3. 「三位一体の乙訓(まち)を創造し運動を広めよう」(まちづくり室)

(まちづくり委員会)

- ① 6月例会の開催(オープン例会)
- ② 二市一町の行政・各諸団体との連携
- ③ 公益社団法人日本青年会議所・協働運動の連携と推進
- ④ 各種選挙における公開討論会の実施

(広報渉外委員会)

- ① 10月例会の開催(地域振興検討例会)
- ② 京都ブロック協議会公式訪問の開催
- ③ 行政地域諸団体の情報の収集及び管理
- ④ 青年会議所活動及び地域活動の外部発信並びに会報「おとくに新聞」の制作・発行及び管理(年12回)
- ⑤ 公式ホームページの制作及び管理
- ⑥ LOM外情報に関する内部発信
- ⑦ LOM内外各種事業の記録データ管理

- ⑧ 理事長対談の取材に関する事項
- ⑨ J C I ・公益社団法人日本青年会議所・近畿地区協議会・京都ブロック協議会・各地青年会議所に関する案内・登録手続きに関する事項
- ⑩ 出向者支援に関する事項
- ⑪ 各事業案内のとりまとめに関する事項

4. 「乙訓(まち)の主人公を育て未来を担う子ども達を育もう」(ひとづくり室)

(人間力向上委員会)

- ① 3月例会の開催(オープン例会)
- ② 7月例会の開催(オープン例会)
- ③ 11月例会の開催(オープン例会)
- ④ 資質向上を目的とする事業の開催

(青少年育成委員会)

- ① ①5月例会の開催(オープン例会)
- ② ケイジャーズカップ実行委員会への連携
- ③ 乙訓文化少年団事業の開催
- ④ 乙訓地方小学生駅伝大会委員会への連携
- ⑤ 公益社団法人日本青年会議所・協働運動の実践

5. 「魅力ある仲間を増やし友情を育もう」(仲間づくり室)

(会員拡大委員会)

- ① FTセミナーの開催
- ② 会員拡大活動の実施
- ③ 入会説明会の開催
- ④ 2月例会の開催
- ⑤ 各委員会への会員拡大活動の支援
- ⑥ 会員拡大活動に関する情報管理と更新
- ⑦ 新入会員の入会に至るまでのサポート
- ⑧ 新入会員の入会後のサポート
- ⑨ 新入会員入会式の設営・運営

(会員交流委員会)

- ① 1月例会・新春交歓会の開催
- ② 8月例会・納涼会の開催
- ③ 12月卒業式・忘年会の開催
- ④ 会員交流会の開催
- ⑤ 会員及び特別会員との親睦に関する事項

6. 「信頼性のある運営を行おう」(総務室)

(総務財政委員会)

- ① 5月例会の開催(会員大会)
- ② 12月例会の開催
- ③ 役員セミナーの開催
- ④ 総務及び庶務に関する事項
- ⑤ 事務局の管理運営に関する事項
- ⑥ 会員名簿及び基本資料の作成
- ⑦ LOM運営マニュアルの作成
- ⑧ 会員の活動報告に関する事項
- ⑨ 会員の褒賞・表彰及びブロック等への事業褒賞申請に関する事項
- ⑩ 総会及び理事会・正副理事長会議の設営・運営
- ⑪ 総務審査会議・財務・コンプライアンス会議の設営・運営
- ⑫ デジタル会議の設営・運営
- ⑬ 財務、会計一般に関する事項

公益社団法人乙訓青年会議所
第2次収支予算書(案)
2014年1月1日から2014年12月31日まで

(第1法)

(単位:円)

科目	予算額	前年度予算額	増減	備考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①特定資産運用収入	6,000	10,000	-4,000	
特定資産利息収入	6,000	10,000	-4,000	
②入会金収入	1,770,000	1,210,000	560,000	
新入会員入会金収入	720,000	720,000	0	@60,000円×12名
特別会員入会金収入	1,050,000	490,000	560,000	@70,000円×15名
③会費収入	9,350,000	10,260,000	-910,000	
正会員会費収入	8,450,000	9,360,000	-910,000	@130,000円×65名
新入会員会費収入	900,000	900,000	0	1月～12月迄毎月入会者1名を想定する
賛助会員会費収入	0	0	0	
④事業収入	818,000	1,036,000	-218,000	
事業費繰入収入	0	0	0	
登録料収入	400,000	500,000	-100,000	文化少年団@10,000円×40名
販売収入	0	0	0	
預り金収入	418,000	536,000	-118,000	ブロック大会@4,000×(65名+4名)+@2,000×地区大会(65名+6名)
雑収入	0	0	0	
⑤補助金等収入	0	169,860	-169,860	
国庫補助金収入	0	0	0	
地方公共団体補助金収入	0	0	0	
民間補助金収入	0	169,860	-169,860	3LOM合同例会(他LOMからの補助金)
補助金等交付業務受託収入	0	0	0	
国庫助成金収入	0	0	0	
地方公共団体助成金収入	0	0	0	
民間助成金収入	0	0	0	
⑥寄付金収入	860,000	0	860,000	
飛竹会寄付金収入	500,000	0	500,000	2009年度実績
歴代理事長会寄付金収入	360,000	0	360,000	2009年度実績
その他寄付金収入	0	0	0	
⑦雑収入	1,500	2,000	-500	
受取利息収入	1,500	2,000	-500	
京都ブロック協議会受入収入	0	0	0	
その他雑収入	0	0	0	
事業活動収入計	12,805,500	12,687,860	117,640	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	10,226,000	7,179,000	3,047,000	
総務財政委員会	210,000	245,000	-35,000	
青少年育成委員会	1,202,000	1,350,000	-148,000	
まちづくり委員会	400,000	1,400,000	-1,000,000	
人間力向上委員会	1,230,000	1,200,000	30,000	
広報渉外委員会	250,000	0	250,000	
会員拡大委員会	255,000	305,000	-50,000	
会員交流委員会	1,150,000	1,275,000	-125,000	
35周年特別委員会	4,580,000	0	4,580,000	
JC運動情報委員会	0	317,000	-317,000	
ビジョン会議	0	50,000	-50,000	
特別事業費支出	531,000	501,000	30,000	乙訓ふるさとふれあい駅伝、災害時拠出金、公開討論会、KARA1グランプリ、会長訪問
登録料支出	0	0	0	
預り金支出	418,000	536,000	-118,000	ブロック大会@4,000×(65名+4名)+@2,000×地区大会(65名+6名)
事業予備費支出	0	0	0	
②管理費支出	5,657,581	5,115,718	541,863	
会議費支出	450,000	450,000	0	
給料手当支出	1,800,000	1,800,000	0	@150,000円×12ヶ月
退職給付費用	105,000	105,000	0	月額給与150,000円×70%
福利厚生費支出	310,000	300,000	10,000	事務局員社会保険料
旅費交通費支出	100,000	100,000	0	事務局員交通費
通信・発送費支出	530,000	530,000	0	電話代、切手、定例発送
消耗品支出	300,000	300,000	0	2014年度スローガン幕、封筒他
リース料支出	21,183	21,183	0	コピー機1年間
修繕費支出	0	0	0	
印刷製本費支出	95,000	95,000	0	総会資料印刷費、コピー機印刷費
光熱水料費支出	0	0	0	
賃借料支出	600,000	600,000	0	@50,000円×12ヶ月
業務委託支出	0	0	0	
インフォメーション関係費支出	601,535	551,535	50,000	おとくに新聞、サーバー、ドメイン、ホームページ変更料
保険料支出	0	0	0	
租税公課支出	3,000	3,000	0	印紙代
渉外費支出	60,000	60,000	0	お祝い金、慶弔金、電報等
雑支出	681,863	200,000	481,863	ネットバンキング使用料 JCバッヂ 会員ネームタグ、税理士顧問料他
管理・運営予備費支出	0	0	0	
③負担金支出	1,703,043	1,810,100	-107,057	
JC1負担金支出	87,318	84,000	3,318	@1,134円×(65名+12名)
日本JC負担金支出	430,000	465,000	-35,000	
基本金支出	60,000	60,000	0	会員数50名迄が30,000円 25名増す毎に15,000円を追加
付加金支出	370,000	405,000	-35,000	@5,000円×(65名+6名)+@2,500円×6名
近畿地区協議会負担金支出	135,200	147,800	-12,600	
基本金支出	2,000	2,000	0	
付加金支出	133,200	145,800	-12,600	@1,800円×(65名+6名)+@900円×6名
京都ブロック協議会負担金支出	548,000	597,000	-49,000	
基本金支出	30,000	30,000	0	

付加金支出	518,000	567,000	-49,000	@7,000円×(65名+6名)+@3,500円×6名
国際協力資金支出	140,525	153,300	-12,775	@1,825円×(65名+12名)
日本JC出向者負担金支出	140,000	120,000	20,000	@20,000円×7名
WeBelieve購読料支出	222,000	243,000	-21,000	@3,000円×(65名+6名)+@1,500円×6名
④他会計への繰入金支出	0	0	0	
一般会計への繰入金支出	0	0	0	
他会計への繰入金支出	0	0	0	
事業活動支出計	17,586,624	14,104,818	3,481,806	
事業活動収支差額	-4,781,124	-1,416,958	-3,364,166	
科目	予算額	予算額	増減	備考
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
①特定資産取崩収入	3,550,000	100,000	3,450,000	
会員基本基金資産取崩収入	1,050,000	100,000	950,000	
周年事業引当資産取崩収入	2,500,000	0	2,500,000	
退職給付引当資産取崩収入	0	0	0	
②固定資産売却収入	0	0	0	
土地売却収入	0	0	0	
建物売却収入	0	0	0	
構築物売却収入	0	0	0	
車両運搬具売却収入	0	0	0	
什器備品売却収入	0	0	0	
電話加入権売却収入	0	0	0	
③固定資産取崩収入	0	0	0	
減価償却積立資産取崩収入	0	0	0	
④敷金・保証金戻り収入	0	0	0	
敷金戻り収入	0	0	0	
出資金戻り収入	0	0	0	
投資活動収入計	3,550,000	100,000	3,450,000	
2. 投資活動支出計				
①特定資産取得支出	500,000	500,000	0	
会員基本基金資産取得支出	0	0	0	
周年事業引当資産取得支出	500,000	500,000	0	
退職給付引当資産取得支出	0	0	0	
②固定資産取得支出	0	0	0	
土地取得支出	0	0	0	
建物取得支出	0	0	0	
構築物取得支出	0	0	0	
車両運搬具取得支出	0	0	0	
什器備品取得支出	0	0	0	
電話加入権取得支出	0	0	0	
減価償却積立資産取得支出	0	0	0	
③敷金・保証金支出	0	0	0	
敷金支出	0	0	0	
出資金支出	0	0	0	
投資活動支出計	500,000	500,000	0	
投資活動収支差額	3,050,000	-400,000	3,450,000	
III 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入				
①借入金収入	0	0	0	
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出				
①借入金返済支出	0	0	0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出	0	217,774	-217,774	
当期収支差額	-1,731,124	-2,034,732	303,608	
前期繰越収支差額	1,736,124	2,034,732	-298,608	
次期繰越収支差額	5,000	0	5,000	

2014年度 公益社団法人乙訓青年会議所
会議構成員

			理 事 会	正 副 理 事 長 会 議
理 事 長	田 中 俊 幸		○議長	○議長
副理事長	三 宅 尚 嗣		○	○
副理事長	松 宮 吾 朗		○	○
副理事長	伊 東 紘 典		○	○
専務理事	嶋 田 年 比 干		○	○
理 事 (35周年特別委員会委員長)	岩 井 一 真		○	▲
理 事 (まちづくり室室長)	川 口 順 也		○	▲
理 事 (人づくり室室長)	河 村 剛		○	▲
理 事 (総務室室長)	山 東 尚 史		○	▽
理 事 (仲間づくり室室長)	末 田 博 士		○	▲
理 事 (総務財政委員会委員長)	足 立 雅 也		○	▽司会
理 事 (人間力向上委員会委員長)	崔 祥 龍		○	▲
理 事 (青少年育成委員会委員長)	谷 川 聡		○	▲
理 事 (会員交流委員会委員長)	谷 口 直 満		○	▲
理 事 (35周年特別委員会副委員長)	三 浦 靖		○	▲
理 事 (広報渉外委員会委員長)	水 原 年 貴		○	▲
理 事 (まちづくり委員会委員長)	南 出 高 志		○	▲
理 事 (会員拡大委員会委員長)	渡 辺 大 樹		○	▲
理 事 (総務財政委員会副委員長)	能 見 太 郎		○司会	▽
監 事	齊 藤 寛 之		□	□
監 事	山 本 博 明		□	□
直前理事長	岡 村 猛		□	□

○：構成員

□：常時出席の上、発言できる

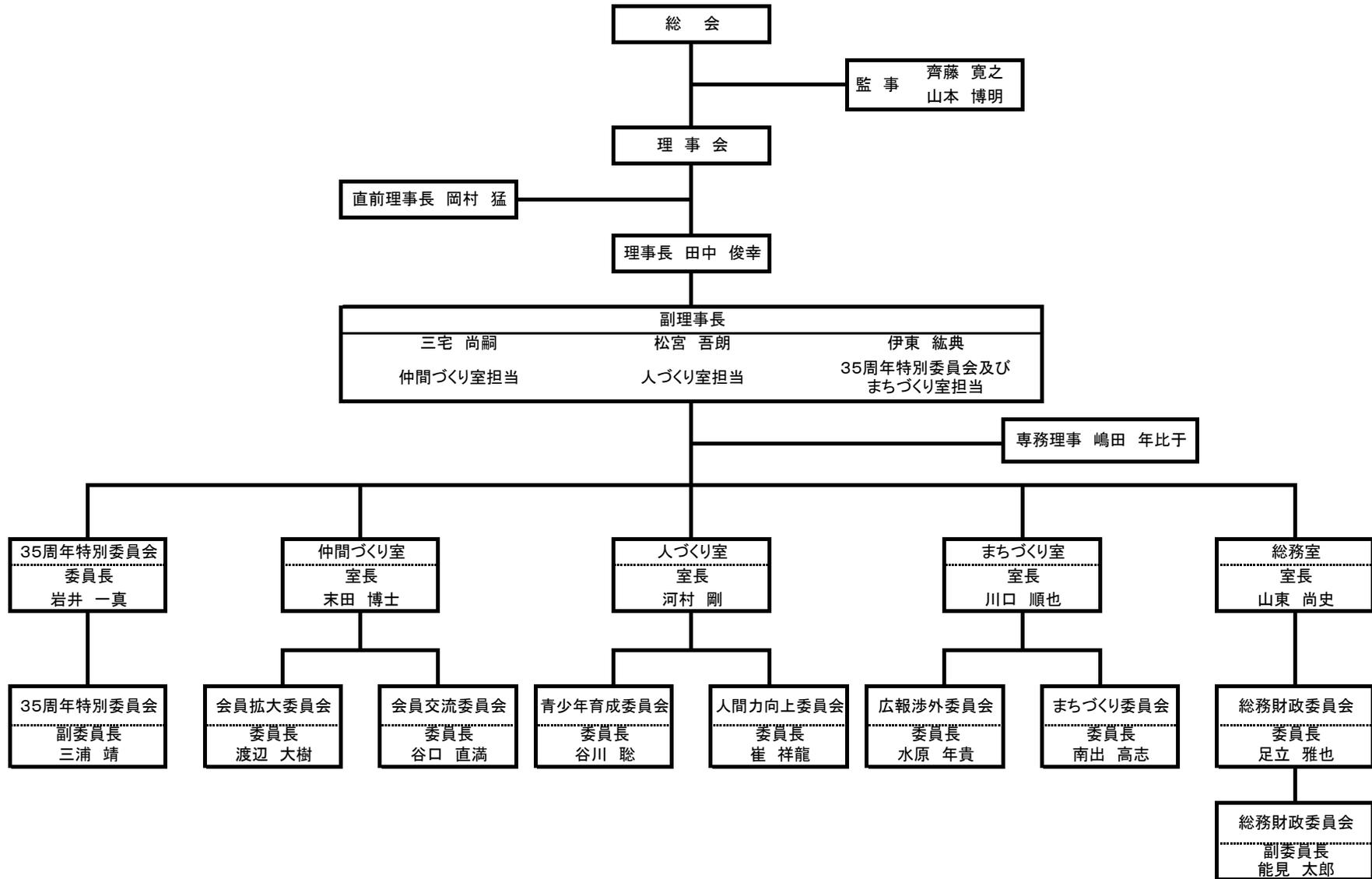
▽：常時オブザーブ

▲：議長の要請を受けて出席する

理事会議事録：事務局長

2014年度 公益社団法人乙訓青年会議所

組織図



2014年度 公益社団法人乙訓青年会議所 委員長方針
総務財政委員会 委員長 足立 雅也

本年度乙訓青年会議所は、35周年という節目の年を迎えます。これは先輩諸兄が「明るい豊かな社会」の実現に向け弛まぬ努力をして来られたからであり、責任世代を担う我々は、先輩諸兄が築いて来られたJAYCEEとしての誇りを次代へ引き継ぎ、地域から愛され、これまで以上に地域になくなくてはならない存在にならなければなりません。また、公益社団法人として4年目を迎える今、公益性と透明性のある運営方法を正しく執行する事は当然の事となり、この管理体制を継続出来る基盤を整える事が必要であると考えます。

総務財政委員会は、先輩諸兄が築き上げて来られた会議運営を継承しながら、建設的で活発な議論を重ねる為に、各委員会との連絡を密にし、情報の共有と意思の疎通を図り、円滑な議案上程が行える様に取り組みます。全ての事業は「計画立案」「実行」「結果検証・引継ぎ」というプロセスで行われます。その中で「計画立案」「結果検証・引継ぎ」が行われる会議運営を担う委員会として、責任と自覚を持ち活動して参ります。公益社団法人として我々が行う活動や事業は当然社会に役立つものであり、それに繋がるものでなければならぬと考えます。また、それに掛かる事業費は、メンバーの貴重な年会費から拠出しているという自覚を持ち、事業目的に対する費用対効果に於いても十分に精査致します。役員セミナーでは、初めて役員を担われるメンバーが多数おられる事を考慮し、理事長から1年間の活動方針を講演頂きます。そして、2020年ビジョン達成に向け、新たな5カ年行動指針が策定される今年度、役員全員がどの様に活動して行く必要があるのかを伝える講演を実施し、役員としての責任や心構えを自覚して頂きます。また、管理体制を継続出来る基盤を整える為にも、システムやルールを周知徹底する事務事項説明会を開催致します。財務体制のより正確な引継ぎを行える財務専用の引継ぎマニュアル作りも進めて参ります。12月例会に於いては、1年間の活動の集大成として顕著な活動を行ったメンバーを褒賞にて称え、他のメンバーが今後更にJC活動に邁進する事への励みとなる様に設え、メンバーが活動して来た1年間を振り返り、次年度へと繋がる例会を行います。また、本年度行われる35周年記念式典、懇親会、記念事業が円滑に行える様に活動して参ります。そして、会員拡大活動、まちづくり事業、青少年育成事業に於きましては、各担当委員会と連携し、参加協力致します。

人生に限りがある様にJC活動も40歳で卒業を迎えます。また、単年度制で活動する1年間にも同じく限りがあります。会議を経て組織を動かす青年会議所に於いて限られた時間を有効に使用し、より良い事業の開催と組織運営を目指す為に、総務財政委員会メンバー全員が「時間対効果を高めよう」をテーマに時間を費用と捉え、各委員会にも周知徹底を図り不動の心で1年間活動して参ります。

乙訓青年会議所は、私達の先輩諸兄が郷土愛を再認識し、自らの研鑽を通じて友情を深め、明るい豊かな社会の実現を目指し設立されました。そして現在に至るまで奉仕・修練・友情を三信条として切磋琢磨しながら活動を続けて来られ、本年度35周年を迎えます。私達現役メンバーはこの歴史や伝統、想いをしっかりと受け継ぎ、どんな困難にも負けず揺るぎない不動の心で、未来の明るい豊かな乙訓への原動力となり活動し、次代に継承して行かなければなりません。

現在、日本の多くの家庭は、かつての大家族ではなく、夫婦と子どもだけの核家族が増え、さらにゲーム機やインターネット等の普及により、子ども達は地域の様々な年代の人々と直接触れ合う機会が少なくなっています。また、少年非行や不登校問題、学級崩壊などが問題となっており、その原因は親や大人が大きく関わっていると考えます。

本年度、青少年育成委員会では、人を敬い和を大切にし、道徳心を養い慈愛の心を持って活動して参ります。私達が子どもの模範となり背中を見せる事で、青少年の健全な育成を行い、明るい豊かな乙訓の実現を目指します。まずは、小学1年生から6年生までを対象に、各委員会と協力し乙訓文化少年団を開催致します。そして子ども達が、学校では出来ない体験を通じて団体行動の中で養える協調性や規律、愛郷心や仲間に対する優しさや思いやりを持つといった、心豊かな人間性を育くめる事業を行います。さらに私達大人が自分自身を見つめ直し律する事で、メンバー自身の成長に繋げていきます。また、5月オープン例会では、乙訓の未来とも言うべき子ども達の健全な育成の為に、私達大人が今一度道徳心を養い、慈愛の心を持って子ども達とコミュニケーションを図る必要性をお伝えします。そして子ども達に夢を持ってもらう大切さを、地域の皆様と共に学ぶ例会を開催致します。さらにケイジャーズカップでは、子ども達が試合に集中して熱闘が繰り広げられるよう実行委員会と連携協力し、大会運営を行います。また、乙訓ふるさとふれあい駅伝では大会委員会と連携して、子ども達がレースに集中して全力を尽くせるよう大会運営を行います。そして35周年記念式典及び記念事業、まちづくり事業への参加協力も「和敬清寂」の心で委員会メンバー一丸となり取り組みます。さらに私達が行う事業を遂行し、明るい豊かな社会の実現を達成するには多くの同志が必要であり、会員拡大委員会と連携協力する事で、会員拡大活動を進めて参ります。

最後に青少年育成委員会は、忘己利他の精神を持ってあらゆる事業に率先して取り組み、感謝の気持ちを常に伝え年間活動して参ります。人はどうしても自分を中心に考えてしまいがちですが、己を忘れて他を利する行動により感謝の気持ちもより大きくなり、自ら成長していきます。乙訓の未来とも言うべき子ども達も、その様な大人の背中を見て乙訓や他人の為に尽くせる大人に成長し、思いやりが溢れる明るい豊かな乙訓に繋げて参ります。

本年度、乙訓青年会議所は35周年という節目の年を迎えます。この目まぐるしく変わる社会情勢の中、これまで先輩諸兄は設立当初からの変わらぬ熱い想いを持って地域に根ざした活動をして来られました。この脈々と受け継がれて来た活動を未来永劫継続させていく為にも、感謝と誇りを胸に新たなる乙訓づくりのビジョンを掲げ、更なる歩みを進めて行く必要があります。

これまで我々は2020年ビジョン「地球市民意識あふれる乙訓」や中短期ビジョンである新5ヶ年行動指針『笑顔があふれる「市民が主役」の乙訓創り』に基づいてまちづくり活動を行って参りました。そして公益社団法人として4年目を迎え、名実共に公益団体として活動している我々は、今後更に素晴らしい乙訓を創造する為にも先輩諸兄が築いてこられた活動を礎に、更なる進化が求められます。その為にも青年会議所が主体となり、行政、地域諸団体、市民が三位一体となれる地域コミュニケーションの場を設け、お互いの個性を尊重し合いながら同じ目標に向かって歩む事の出来る新しいネットワークを構築する事が必要不可欠です。このネットワークを構築する事が出来れば、地域の負託と信頼により一層応える事が出来ると考えます。

そこで本年度、まちづくり委員会では「和」を合言葉に活動して参ります。「和」とは人と人との調和を表し、「話」をもって人同士の繋がりから信頼を生み出し、強固な「輪」を創り上げる事を目指します。「輪」とはネットワークを表し、34年間築き上げて来られた活動を活かして更なるネットワーク構築を目指します。そして「まちの主人公が集う活気あふれる乙訓の創造」を実現すべく、地域諸団体の取り組みにも積極的に参加し、まちづくりについて互いに協力し合える関係が確立出来る活動を行います。6月オープン例会では「我々の乙訓をみんなでつくる」をテーマに、我々を含む地域諸団体が行われている多岐に渡る活動を知って相互理解を図り、その上で皆が同じ方向を目指すまちづくりの意義を見出し、より良いまちづくりの形としての35周年記念事業に繋がる例会を開催致します。そして未来の乙訓のあり方を共に考え、地域の大人が責任を持って将来を選択する機会を創る為にも、公開討論会を開催し市民主導型の社会へと繋げます。また35周年記念式典及び記念事業への協力も委員会メンバー一同、力を合わせて取り組んで参ります。更に今後の乙訓青年会議所の組織を強固なものにする為にも会員拡大活動に尽力し、地域の宝である子どもの育成事業にも積極的に参加して参ります。

最後に当委員会が乙訓青年会議所を代表して地域諸団体と関わっていく責任を自覚し、乙訓地域の発展を希求する団体である事を常に念頭に置いて、如何なる時も不動の心で地域のリーダーとなるべく活動します。その為にも私自身が積極的に想いを伝え、委員会メンバー一人ひとりが自分の考えを持って意見し合える委員会運営を行う事で、自己を研鑽し未来への原動力となれるよう活動して参ります。

本年度で35年目を迎える乙訓青年会議所は「明るい豊かな社会」の実現を目指し活動を繋いできました。この素晴らしい乙訓青年会議所を継続する為に、我々は脈々と受け継がれてきた志を受け継ぎ、誇りと感謝を胸に新たなる歩みを進めていかなければなりません。しかし昨今の社会状況から読み取れる様に移り変わりの激しい時代に生きる我々は、自らの立ち位置を見失い易い状況下にあります。どの様な社会状況においても不動の心で行動していく為には、生まれ育った日本の良き心を改めて学ぶ事が必要だと考えます。そして一人ひとりが心豊かに気概を持って活動し、地域の負託と信頼に応えるべく、率先して明るい未来を創り出していかなければなりません。

我々が明るい未来を創り出していく為には一人ひとりの人間力の向上が必要です。人間力とは道德心、主体性と実行力を兼ね備えた不動の心で行動できる人だと考えます。道德心とは善悪を判断し善を行う心であり、善とは人を敬い人の為に行動できる利他の精神であると考えます。また主体性とは組織の中で自分の役割を自覚し、責任を持ったリーダーとしての考える力であると考えます。その道德心と主体性を持ち、地域の為に行動できる実行力が必要です。地域に住まう人と人がお互いを敬い、いきいきとした活気のある乙訓にする為に、「不動心、未来への原動力となれ」のスローガンの下、我々が人間力向上を目指し、率先して行動していかなければなりません。

本年度人間力向上委員会では、人間力を向上させる為に3回の例会を担当し、地域に開かれた学びの場となる様にいずれもオープン例会として開催します。3月例会では道德心を学ぶ事で、人を敬い人の為に行動できる利他の精神を強く持つきっかけを得て頂きます。7月例会では主体性について学ぶ事で、組織の中で自覚と責任を持ったリーダーとしての立ち位置をしっかりと定めた考える力を得て頂きます。そして11月例会では3月、7月の例会を踏まえた上で実行力を発揮するきっかけを得て、不動の心で行動できる人になって頂きます。また資質向上を目的とし、メンバー向けの事業を開催する事で人間力の向上に繋げて頂きます。これらの事業を通して道德心、主体性と実行力を兼ね備えた不動の心で行動できる人になり、乙訓にも人間力溢れる人を増やしていく事で、「明るい豊かな社会」の実現を目指して参ります。そして創立35周年の記念式典や記念事業において、35周年特別委員会と連携し協力して参ります。さらにまちづくり事業や青少年育成事業へ積極的に参加と協力を行い、同じ志高い仲間を増やす為に、会員拡大にも積極的に取り組んで参ります。最後に人間力向上委員会では、「一人は皆の為、皆はひとつの為」を委員会スローガンとして活動し、委員会メンバーが率先して人間力向上を目指します。そして委員会メンバーが人を敬い、自覚と責任を持って一所懸命活動し、友情を育む事で力を合わせ、明るい未来を創り出していく原動力となって行動して参ります。

乙訓青年会議所は「この乙訓を良くしたい」との熱い思いで発足し、明るい豊かな社会の実現に向けて揺るぎない心で日々JC運動を継承しており、本年度で35年目の節目を迎えます。35周年を迎えるにあたり、過去の検証を踏まえて更なる地域の発展に寄与すべく運動していかなければなりません。その為にもまずは私達の運動や活動を市民の方々に知って頂き、行政や地域諸団体とも密に連携を取っていく必要があると考えます。また乙訓青年会議所は公益社団法人格を取得しており、広報面に於いても私達だけの活動だけでは無く、他団体の活動を市民の方々が知る機会を創出する責務があると考えます。乙訓地域には地域を愛し地域の為に活動しておられる団体が多く存在する一方で、その素晴らしい活動を知らない方々が沢山おられます。「明るい豊かな乙訓」を築き上げる為にも一人でも多くの方々に周知して頂く必要があり、それが即ち我々の運動に対しての理解を深めて頂ける事に繋がると考えます。

本年度、広報渉外委員会では二市一町の代表の方々と理事長対談や乙訓の新たな団体の活動、乙訓地域の誇るべき部分を市民の方々により一層お伝えする為に、長年にわたり継続作成してきた広報誌「おとくにしんぶん」を充実させて参ります。また広報誌の他に現在は様々な情報媒体があります。その中でもホームページ、SNSを活用する事で青年会議所運動の必要性を積極的に広報し、行政や地域諸団体の活動に関する情報も発信して参ります。10月には地域振興検討例会を行い、乙訓青年会議所の事業だけではなく他団体の事業活動をお互いに知って学びを得る機会を設け、相互理解を深めて各々の個性を尊重し、前向きに行動出来る乙訓地域振興の新たなネットワーク構築に繋がるよう努めます。渉外活動では、JCI、日本青年会議所、近畿地区協議会、京都ブロック協議会、京都ブロック会長公式訪問、各地青年会議所に関する各種案内、登録手続きを迅速かつ正確に行い、各事業等で参加メンバーが多く学びの機会を得られるように努めます。また活発に活動して頂けるように出向者支援として、一人でも多くのメンバーが熱い思いで参加できるよう行います。全ての情報を発信していく為にも、まちづくり事業や青少年育成事業、そして記念すべき35周年記念事業など数々の事業に積極的に参加と協力をして参ります。今後更なる青年会議所活動を行う為にも一人でも多くの新たな同志が必要であり、会員拡大活動にも積極的な協力を行って参ります。

最後に広報渉外委員会では、数多くの学びの機会をメンバーの皆様に提供する為にまずは私達自身が事業をより理解して案内を行い、併せて積極的に参加致します。一年間を通じて楽しく実りのある委員会を開催し、委員会メンバーが不動心を身に付けた未来への原動力となる人材へと成長します。そして、今後の活動に自信が持てるよう邁進して参ります。何事にも切磋琢磨し「奉仕、修練」そして信頼し合える「友情」を構築する、そんな素敵な委員会を創ります。

乙訓青年会議所は34年もの間、先輩諸兄が絶え間なく勤しまれ、脈々と受け継がれてきた歴史と伝統を守り、発展させつつ活動されてきました。設立当初からの理念である「明るい豊かな社会」の実現に近づく為には高い志を持った同志を一人でも多く増やす必要があります。会員拡大は我々の責務であると考えます。乙訓青年会議所は昨年度15名が卒業され、本年度12名のメンバーが卒業を迎える中、会員数の減少は事業の実施や組織の運営にも影響を及ぼします。私が考える青年会議所活動の魅力は三信条で掲げられている「奉仕、修練、友情」を身をもって経験し、そこで得られる気付きや学びそして感動であり、これらは何物にも代え難い自己の成長に繋がると確信しています。この経験を次の世代にしっかりと伝え、乙訓青年会議所の更なる発展の為にLOMメンバー全員で会員拡大活動に取り組まなければなりません。

本年度は入会目標を20名と掲げます。この人数は乙訓青年会議所全体がベクトルを揃えて行動すれば夢のような数字ではありません。有名な言葉に「一人で見るとはただの夢、皆で見るとは現実になる」とあります。メンバー全員が何の為に拡大するのかを考え、一人ひとりが目標必達の意識で行動すれば必ず達成出来ます。その為の手法として、まずは委員会メンバーの意識を高め、昨年度からの会員拡大データやリストを引き継ぎ、乙訓地域を拠点として活動する様々な団体や特別会員からの情報収集を行い、幅広く拡大の声を大にし、魅力や活動内容を積極的に伝えます。その中で、2月例会では、乙訓青年会議所の会員である事に誇りを持ち、会員拡大の重要性を理解して頂き、全メンバーが意識を高め「不動の心」を持って、拡大活動に取り組む事が出来る様に開催致します。そして、乙訓JC説明会では乙訓青年会議所の歴史、理念、活動を年齢に関わらず伝え、経験の異なる現役メンバーとの意見交換を行い、JC運動への興味や魅力を感じて頂く事で入会への決意や紹介に繋がります。さらに、新入会員のフォローアップも率先して行います。FTセミナーでは5年後、10年後を見据えた上でFMメンバーに今後のJC活動を有意義な物にして頂く為に青年会議所に対する理解を深め、活動意識を高めて頂く事を目的とし、メンバー全員が課題に取り組み協力し合い、切磋琢磨する事で友情を育て頂きます。また、様々な業種の方と意見交換が出来る異業種交流会を開催致します。そして1年間を通して委員会メンバーで35周年事業、式典、まちづくり事業、青少年育成事業にも積極的に参加し、協力、連携して参ります。

結びに、当委員会ではどんな困難にも前向きに楽しみながら取り組み、メンバー同士の絆や友情を築き、私自身が率先して行動し、委員会メンバー全員が「未来への原動力」となれる様に活動します。そして活気ある乙訓青年会議所であり続ける為に、「不動の心」を持って一人でも多くの同志を募るよう邁進して参ります。

我々乙訓青年会議所は、「明るい豊かな社会」の実現に向けて青年会議所運動に取り組んでいます。本年度に35周年を迎えるにあたり乙訓青年会議所を更に、発展させる為にも、一致団結してより一層の結束力を高めなければなりません。その為には、「不動心、未来への原動力となれ」の精神を持って組織の活性化へと繋げると共に、地域の発展にも繋げる事が必要です。

会員交流委員会の担いは、メンバー同士が互いに切磋琢磨し、本音で語り合い、友情を深めて一枚岩となって青年会議所活動に邁進出来る組織を目指します。様々な交流を通して思いやりの心と感謝の心を持って行動する事を学び、思いやりを伝える事により、今まで以上の信頼関係を築き上げ、絆を深める事で、自然と相手を敬いながら共に活動し共通の理念の達成を目指す先導役であると考えます。

本年度、会員交流委員会が担当させて頂く1月例会では、我々乙訓青年会議所が向かうべき方向性を出席者全員に認識させて頂くと共に、35周年を迎えるにあたり、感謝の気持ちを持ち、意気込みも新たにスタートして頂ける例会を開催致します。新春交歓会ではご参加頂く行政関係者、特別会員、他LOMの皆様と新春の挨拶を交わし、交流を通しておもてなしの心を感じて頂くと共に、メンバー全員に本年度も共に活動出来る事に感謝の気持ちを持って頂ける場と致します。8月例会では各委員会が掲げられた方針を再認識し、最後まで全力でやり遂げる意気込みをメンバー全員に伝えて頂ける例会を開催致します。納涼会では、これまでの活動に対し委員会メンバーと出会えた事に感謝の念を持って労を労い、8月以降も各委員会が、相手を思いやる気持ちを持って頂ける交流の場を設え致します。卒業式では、卒業生の青年会議所活動における功績を称え、新たな門出をお祝いすると共に心に残る卒業式を行います。忘年会では1年間の活動を互いに称え合い、次年度へ向けて新たな気持ちを持って更なる友情を育みます。会員交流会では、各委員会内で交流を行うと共に、メンバー同士の絆の構築を図り信頼関係を深めて頂きます。また、特別会員との親睦も全力でサポートして参ります。そして、同室である会員拡大委員会と協力し、積極的に会員拡大活動に取り組むと共に、青少年育成活動やまちづくり活動に携わり、35周年に向けて35周年特別委員会と連携を図り率先して参加、協力致します。

最後に会員交流委員会では、まず委員会メンバーに青年会議所活動の楽しさを知って頂く為にも、まず、私自身がメンバーの皆様と明るく楽しく接し、相手の立場を思いやり尊重する心を持って行動する姿を先頭に立って見せると共に、委員会メンバーとの絆をしっかりと構築致します。また、各事業に委員会メンバー全員で積極的に参加し、率先して交流を図る事でメンバー全員が一枚岩となり乙訓青年会議所全体の向上に繋がると信じて一生懸命活動に取り組んで参ります。

本年度、乙訓青年会議所は創立35周年の節目を迎えます。今日まで様々な困難を乗り越え、熱い想いで行動し続けられた先輩諸兄、更に私たちの活動にご協力頂いた関係諸団体の皆様には感謝します。35年の歴史ある乙訓青年会議所ではありますが「明るい豊かな社会」の実現への想いは、創立時より今日に至るまで変わりません。次代の担い手たる青年として、理想に燃え、未来への期待を強く持ち、大きな責任を自覚し「明るい豊かな社会」の実現へ向けて、率先して行動していく事が必要です。

私たち35周年特別委員会は、周年時のみに設置される特別委員会です。この5年に一度の委員会活動を成長出来る大きな機会と捉え、委員会メンバー一人ひとりが自信と誇りを持ち、一つひとつの事業に不動の心で取り組みます。その姿をLOMメンバーに見て頂く事で、LOM全体を活性化させ、更なるLOMの発展に繋がると考えます。

本年度35周年特別委員会では、34年間の歴史を振り返ると共に、私たちが掲げる2020年ビジョン「地球市民意識あふれる乙訓」の達成に向け、記念式典にて次の5年先を見据えた行動指針を発表し、乙訓青年会議所の方向性をご理解頂きます。我々現役メンバーは、脈々と受け継がれてきた創始の精神と先輩諸兄の志を受け継ぎ、誇りと感謝を胸に新たな歩みを進めて行かなければなりません。その為にも、特別会員の皆様にも現役メンバーの結束力を示すと共に、地域諸団体及び行政関係の皆様に対しても、今後の乙訓青年会議所に更なる期待感を示せる記念式典と懇親会を開催します。また、乙訓青年会議所のこれまでの歴史や活動を皆様にお伝え出来るよう記念誌の制作をします。そして、地域コミュニティの活性化に向け、多くの方が様々な気付きや学びを得るだけでなく、活気に満ちあふれた乙訓の未来を共有出来る記念事業を開催します。二市一町の行政と、地域を見つめ素晴らしい乙訓にしようと活動されている関係諸団体の皆様と、これまで築いてきた絆を更に深く太い物にしなごう、この事業に関わる全ての方が一つになって、乙訓地域の新しいネットワーク構築のきっかけを創出します。これらの事業を円滑に行う為にも、各委員会との連携と調整をしっかりと執り行い、委員会メンバーの力を集結出来るように活動します。ネットワークを永続させる為には、組織は盤石でなければなりません。志の高い会員を一人でも多く増やす会員拡大活動は重要となって来ます。会員拡大委員会への連携と協力を積極的に行い、まちづくり事業や青少年育成事業にも同様に委員会メンバー一人ひとりが能動的に取り組みます。

最後に35周年特別委員会では、連なりの心を持って行動します。他人の事を思いやる気持ちと、人を敬い礼を尽くして感謝とおもてなしの心で委員会メンバー同士が助け合いながら委員会活動を行います。充実感と学びがあり、夢や希望を掴み取る為に一歩踏み出して行ける委員会を目指し、一年間活動します。

2014年度 公益社団法人乙訓青年会議所 出向者一覧

【公益社団法人日本青年会議所】

JCプログラム実践委員会	委員	齊藤寛之
災害・復興支援委員会	委員	三宅尚嗣
災害・復興支援委員会	委員	川口順也
主権国家確立委員会	委員	松宮吾朗
JC運動発信会議	委員	河村剛
渉外委員会	委員	石井佑典
渉外委員会	委員	堤淳太

【公益社団法人日本青年会議所 近畿地区協議会】

財政・規則特別委員会	委員	川口順也
活気に満ちあふれた地域創造委員会	委員	高岡博文
活気に満ちあふれた地域創造委員会	委員	三浦靖
意気あふれる人財育成委員会	委員	村井一雄

【公益社団法人日本青年会議所 近畿地区 京都ブロック協議会】

	副会長	三宅尚嗣
総務情報委員会	委員長	河村剛
総務情報委員会	総括幹事	中路耕太
総務情報委員会	会計幹事	清水野分
総務情報委員会	委員	岩本伸一
総務情報委員会	委員	大塚健介
総務情報委員会	委員	小山真司
たくましい京都創造委員会	副委員長	塩見知哉
たくましい京都創造委員会	委員	池宮陽一
たくましい京都創造委員会	委員	谷川一俊
たくましい京都創造委員会	委員	松本正義
たくましい京都創造委員会	委員	能見太郎
国際交流推進委員会	副委員長	菜島拓朗
国際交流推進委員会	委員	末田博士
国際交流推進委員会	委員	阿部清隆
国際交流推進委員会	委員	岩井泉二郎
ブロック大会運営委員会	委員	伊藤武
ブロック大会運営委員会	委員	中川浩司
ブロック大会運営委員会	委員	渡邊俊輔

2014年度 公益社団法人乙訓青年会議所 年間公式スケジュール(案)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
総 会		第1回通常総会 5日(水)								第1回臨時総会 1日(水)		第2回臨時総会 5日(金)
例 会	8日(水)	13日(木)	13日(木)	10日(木)	8日(木)	12日(木)	10日(木)	7日(木)	14日(日)	9日(木)	13日(木)	11日(木)
理 事 会	16日(木)	20日(木)	20日(木)	17日(木)	15日(木)	19日(木)	17日(木)	21日(木)	18日(木)	16日(木)	20日(木)	18日(木)
正副理事長会議	4日(土)	6日(木)	6日(木)	3日(木)	1日(木)	5日(木)	3日(木)	7日(木)	4日(木)	2日(木)	6日(木)	4日(木)
総務財政委員会	23日(木)	27日(木)	27日(木)	24日(木)	22日(木)	26日(木)	24日(木)	21日(木)	25日(木)	23日(木)	27日(木)	25日(木)
青少年育成委員会	13日(月)	10日(月)	10日(月)	14日(月)	12日(月)	9日(月)	14日(月)	11日(月)	8日(月)	13日(月)	10日(月)	8日(月)
まちづくり委員会	21日(火)	18日(火)	18日(火)	15日(火)	20日(火)	17日(火)	15日(火)	19日(火)	16日(火)	21日(火)	18日(火)	15日(火)
人間力向上委員会	14日(火)	11日(火)	11日(火)	8日(火)	13日(火)	10日(火)	8日(火)	12日(火)	9日(火)	14日(火)	11日(火)	9日(火)
広報渉外委員会	28日(火)	25日(火)	25日(火)	22日(火)	27日(火)	24日(火)	22日(火)	26日(火)	23日(火)	28日(火)	25日(火)	23日(火)
会員拡大委員会	22日(水)	26日(水)	26日(水)	23日(水)	28日(水)	25日(水)	23日(水)	27日(水)	24日(水)	22日(水)	26日(水)	24日(水)
会員交流委員会	20日(月)	17日(月)	17日(月)	21日(月)	19日(月)	16日(月)	21日(月)	18日(月)	15日(月)	20日(月)	17日(月)	15日(月)
35周年特別委員会	27日(月)	24日(月)	24日(月)	28日(月)	26日(月)	23日(月)	28日(月)	25日(月)	22日(月)	27日(月)	24日(月)	22日(月)
そ の 他	事務局開き6日(月) LOMナイト25日(土)	ケイジャーズ予選 11日(火)16日(日)	ケイジャーズ決勝 16日(日)							FTセミナー 18(土)日~19日(日)		卒業式・忘年会 12日(金) 事務局納め 26日(金)
京 都 ブ ロ ッ ク 協 議 会	新春訪問 会長LOM訪問	会長LOM訪問	会長LOM訪問	京都府行政との対談	国民参加型憲法事業 ブロック大会 綾部 25日(日)	国際事業 27日(金)~29日(日)	公開討論会	アカデミー事業 23日(土)		本次年度合同会議 31日(金)		
府内青年会議所周年												
” 会員会議所	31日(金) 亀岡	28日(金) 山城	29日(土) 宮津	26日(土) 宇治	24日(土) 綾部	24日(火) 乙訓	29日(火)		27日(土) 船井	31日(金) 京都	29日(土) 亀岡	
” 正副役員会議	15日(水) 亀岡	8日(土) 城陽	11日(火) 福知山	11日(金) 乙訓	10日(土) 船井	14日(土) 山城	5日(土) 京都		6日(土) 綾部	4日(土) 宇治	8日(土) 亀岡	
” 財政特別審査会議コン プライアンス審査		15日(土)	22日(土)	19日(土)	17日(土)	21日(土)	12日(土)		13日(土)	18日(土)	15日(土)	
近畿地区協議会					GTS 28日~1日							
NOM主要事業	京都会議 (京都) 23日(木)~26日(日)						サマーコンファレンス (横浜) 18日(金)~20日(日)			全国大会 (松山) 9日(木)~12日(日)		
JCI諸会議											JCI世界会議 4日(火)~9日(日)	